

第1章

ESD シナリオづくりプロジェクト



第五回ワークショップ

○○教育とESDをつなぐ方法を探る

ESDシナリオづくりプロジェクト

ESD-J事務局長 村上千里

ESDは決して新しいものではなく、環境教育や人権教育、開発教育など、すでに行われている活動がつながりあい、地域づくりとも関連しながら実践されていくことで実現できるものであると考えられている。しかしながら、具体的にどのようにつながり、どのような教育活動が実践されればESDなのか、わかりやすい取組みや道筋が示されてはいないのが現状だ。

2005年1月にユネスコが発表した「ESDの10年国際実施計画案」には、「既存の教育活動にESDを溶け込ませるシナリオが必要である」と記されていた。そこでESD-Jも、「具体的にどうすればいいの?」という問い合わせに答えるシナリオを、ESDにつながる教育活動に取り組む全国レベルの団体とともにつくってみようと考えたのである。10分野・18団体に参加を呼びかけ、9分野14団体20名の方々の参加を得ることができ、企画チームには嵯峨創平さん、福田寛之さんらを迎えることができた。そして2006年9月、ESDシナリオづくりプロジェクトがスタートした。

本プロジェクト参加メンバー (敬称略)



エネルギー環境
教育情報センター
大内敏史



エネルギー環境
教育情報センター
吉田公武



日本環境教育
フォーラム
若林千賀子



日本環境教育
フォーラム
小堀武信



日本ネイチャーゲーム協会
渡辺峰生



日本ネイチャーゲーム協会
藤田航平



日本自然保護
協会
志村智子



日本野鳥の会
安西英明



自然体験活動
推進協議会
内村美紀



ガールスカウト
日本連盟
片岡麻里



ボーイスカウト
日本連盟
吉村敏



全国社会福祉
協議会
河辺裕子



アジア・太平洋
人権情報センター
前川実



日本ユネスコ
協会連盟
長倉義信



東京女子大学
竹内久顕
(個人参加)



ハーグ平和アピール平
和教育地球キャンペーン
浅川和也
(個人参加)



アジア女性交流
・研究フォーラム
太田まさこ



農山漁村文化
協会
清水悟



キーパーソン 21
朝山あつこ



ESD-J
村上千里



環境文化のため
の対話研究所
嵯峨創平



気象キャスター
ネットワーク
福田寛之

拡大企画メンバー

森良 (NPO法人エコ・コミュニケーションセンター)

青木将幸 (フリーランス)

若林千賀子 ((社)日本環境教育フォーラム)

サポートスタッフ

佐々木雅一 (ESD-J)

■プロジェクトの概要

このプロジェクトは当初、「それぞれの教育分野で典型的に行われているプログラムをベースに、ESD的に発展させるアイデアをだし合い、ESD的なプログラムをいくつか提案する」というイメージでスタートしようとしていた。しかし、企画メンバーですすめ方を検討していくなかで、

- 「ESDに発展させる」という表現への違和感（ESDは○○教育の上位にあるものという誤解を生み、ともに創りあげていこうとしているスタンスにそぐわない）
- 「シナリオ」というと「他人から与えられ、そのとおりに演じるもの」というイメージがあるが、ESDのシナリオは当事者が創りあげていくもの

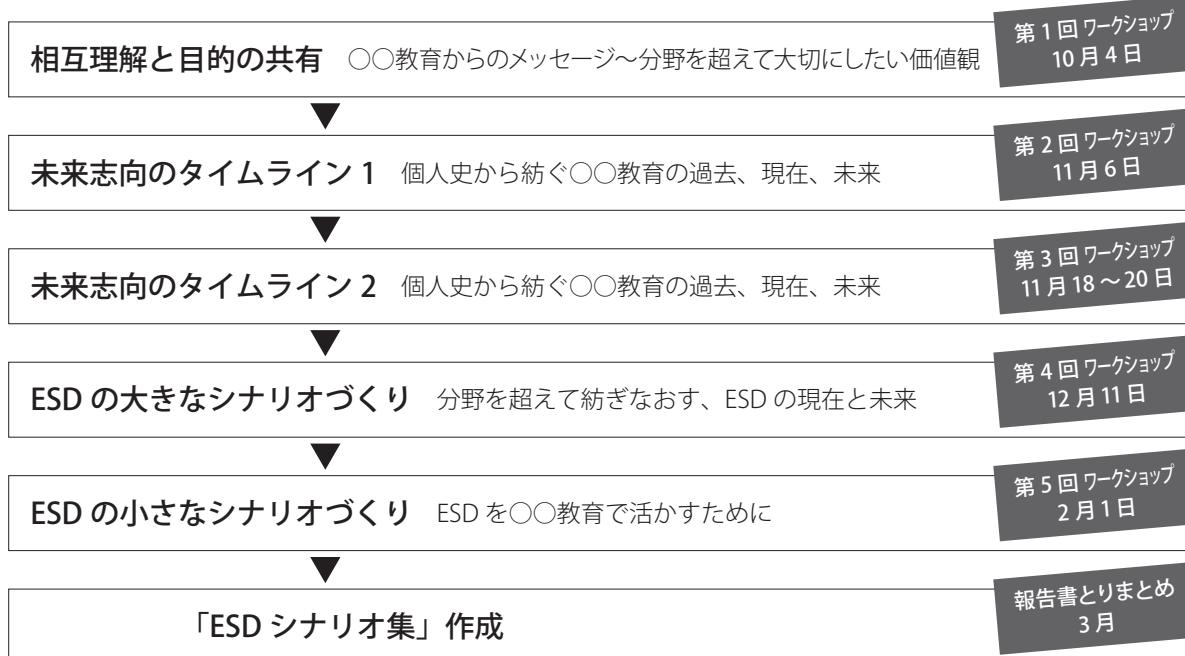
といった認識が共有され、既存の教育活動をESDにつなげてゆくシナリオを「大きなシナリオ」と「小さなシナリオ」という二つに分けて考えることになった。

「大きなシナリオ」とは、さまざまな教育分野の人たちが共有できるコアな価値観や方法論、そしてそれが直面している壁を乗り超えるための「飛躍のカギ」を探りだすことによって描けるであろう、ESDへ向かう大きな流れ・ビジョンのようなもの。これを○○教育にかかわる人それぞれがもつ学習手法・大切にしている価値・育みたい力、歴史（事件や失敗、教訓、現在直面している壁）などの多様性を認めながら、互いに学び合い、共有することにした。

そしてその大きなシナリオの方向性に沿って、今ある具体的な活動やプログラムをどのように展開させていくか、その展開例が「小さなシナリオ」だ。企画当初はこの小さなシナリオをたくさん例示することで、ESD的な学びを広げていけないかと考えていたが、それよりも、大きなシナリオをある程度共有することが、異分野の人同士のつながり方がみえるようになり、小さなシナリオが生まれる土壌をつくることになるだろう、と考えるようになったのである。

具体的には、以下のようなスケジュールで、全5回のワークショップを実施し、大きなシナリオと小さなシナリオづくりに取り組んだ。

シナリオプロジェクトのすすめ方



■このプロジェクトの成果

この報告書では、ワークショップの成果を、大きく3つにまとめた。

○成果その1：「大きなシナリオ」（13～29ページ）

実際の大きなシナリオは、第2回から第4回に作成したタイムラインのことだが、大切なことは今回のワークショップを通じて、参加者が得たESDへの期待感や他分野の人たちとつながることの可能性だと思われる。そこで、参加者のみなさんには「私が描いた大きなシナリオ」と題して、以下の内容をそれぞれの文章にまとめていただいた。

- ・他の教育活動の歴史や実践になにを学び、どのような魅力を感じたか
- ・ESDをどのようにとらえ、どのような可能性を感じたか
- ・○○教育にどのようにとり入れていけると考えたか

この参加者の思いが将来的に、分野横断的なESDを実施していくさいのベースとなり広がっていくことに、主催者側としては期待を寄せている。また、全国各地で○○教育に取り組む方たちにとって、それぞれの教育分野の方のメッセージは、とても身近でわかりやすいESDの解説文になるのではないかと思う。

メイキング・オブ・ESDシナリオづくりワークショップ

NPO法人環境文化のための対話研究所 嵐嶽創平

これはおもしろい場になるかもしれない

「ESDのシナリオづくりワークショップをしたいんだけど」と事務局長の村上さんから相談を受けたとき、まっ先に思ったのは「なんだそれ？」という疑問符だった。よく聞くとそれは、ESD-Jに集まるさまざまな団体の教育担当者が一堂に会して、お互いの教育資源をもちよって「各分野の教育活動をESDに発展させる」ための新しいプログラム開発をするためのプロジェクトのことだった。すでに参加メンバーへの声かけはすんでいて、日本を代表する各分野のNPO/NGOの教育担当者が参加する予定だという。これはおもしろい場になるかもしれないと思った。

ESDは「みんなで担ぐ神輿」のイメージ！？

企画コンセプトや5回のプログラムを相談するミーティングをすすめるうちに、はじめに聞いたときから気になっていた「シナリオ」という言葉や「ESDに発展させる」というスタンスを修正する必要性を感じた。

ESD（持続可能な開発のための教育）という教育活動は、「21世紀の人類の未来像を教育活動によって創っていこう」という魅力的な概念だが、従来の教育より上位にあるという位置づけは所与ではない。むしろESDは後発である分、独自の教育理論や手法をもつにいたっていないという弱点

をもつ。どちらかというと、ESDが掲げる目的・価値を実現するために走りながら新しい手法や運動を創っていく、「みんなで担ぐ神輿」的なイメージが正解ではないかと思う。すると「各分野の教育にESDが溶け込む」という姿勢で浸透し、ESDを共有し広めるための「シナリオ」も誰か特定の人がつくるのではなく参加型で創る方法がふさわしいと考えた。

○○教育を非人称概念から顔のみえる相手に

参加型のシナリオづくりのためのワークショップ・プログラムとして2つの方法を提案した。

一つは「大きなシナリオづくり」。持続可能な開発（未来）に向けた多様なアプローチや理念の共存を認め合うための見取り図を参加者全員でつくる作業だ。各教育活動にはそれぞれ固有の出発点や展開の経緯や大切にしている価値観があり、組織運営や教育内容について独自の蓄積がある。そうした流れをできるかぎり尊重しながらESDという大きなテーブルにいたる多様な道筋を描きだすことがねらいだ。

二つめは「小さなシナリオづくり」。各教育活動のなかで培われてきた経験・思い・理念・手法・対象・場などのリソースをつなぎながら、各々が抱えている課題を突破するための糸口となるコラボレーション（協働）プログラムづくり

○成果その2:「小さなシナリオ」(30~35ページ)

第5回のワークショップで作成された3つの「小さなシナリオ」は、その場で顔を合わせたメンバーの個性によって生まれたものであり、ESD的なプログラムのアイデアが詰まっている。時間の制約から詳細なプログラムデザインにはいたっていないが、今後はぜひ詳細設計まで行い、2007年度には具体的な取組みとしてモデル的に実施できれば、と考えている。

○成果その3:ESDシナリオづくりワークショップ「3回パッケージ・プログラム」(36~43ページ)

「ESDのシナリオは他者から与えられるものではなく、当事者が集まって創るもの」という考え方にもとづいて、今回実施した5回のワークショップを地域で行っていただけるようにパッケージ化(半日×3日間)した。具体的なすすめ方やそのまま使えるワークシートをまとめたので、地域で多様な主体が集まってESD事業を検討しようとするときに、ぜひ活用していただきたい。

裏方からの証言

を行うための作業だ。資源や課題や価値観の共有が豊かであるほど、小さなシナリオは多様に生産し続けられるはずだ。

さいごに、隠されたねらいとして「ワークショップ参加者のコミュニティづくり」を考えた。3回のワークショップにおける共同作業や対話を通じて、○○教育を非人称の概念として理解するのではなく「顔のみえる相手として理解する」ことをめざした。参加メンバーの個人史の語りと聞き書きのワークを行うなかで「教育資源の共有」をし、試作した小さなシナリオの実行も可能な「チームづくり」をも図ろうとするプログラムだ。

多くの仲間の知恵を引き継いで

実際の企画コンセプトを固めるには、アドバイザーとして森良さん、青木将幸さんの助言を受けた。「大きなシナリオ」プログラムの原型となったワークシート(39ページ)づくりは志塚昌紀さんとの共同作業の成果だし、「小さなシナリオ」ワークシートとなった企画書フォーマット(42ページ)は川島憲志さん・岩木啓子さんが磨きあげた書式を活用させていただいている。その他、3回のプログラムに埋め込まれた各アクティビティの原型も多くの仲間の知恵を引き継いでいる。とくに、フィリピン教育演劇協会(PETA)の「O-A-O理論」によるプログラミングやファシリテーションの方法には多くを学んでい

る。ファシリテーターの相棒であった福田寛之さんやワークショップ参加メンバーからのフィードバックに感謝すると同時に、「シナリオづくりワークショップ」がESDを共有し広めるツールとして多くの方に活用されることを願っている。

PETAの演劇ワークショップと「O-A-O理論」

フィリピン教育演劇協会(略称PETA)は、1967年に結成された演劇集団。地域に根づいた伝統的な芸能文化から多くのを吸収して独特的の舞台表現を編みだし、フィリピン初のタガログ語による劇場公演を行った。その後300以上の作品を発表する一方で、社会発展に貢献する演劇集団として、社会問題・地域開発・学校教育などの現場で貧困・暴力・人権などの問題に直面する多くの人々へのエンパワーメントに成功してきた。その手法を「民衆演劇(people's theater)」といい、PETAメンバーは芸術家であると同時に教師であることを誇りに「アーティスト・ティチャー」と名のる。

PETAの演劇ワークショップの基本構造が「O-A-O理論」。これは[Orientational]目的を共有し確認する>[Artistic]表現手法や判断材料となる情報を共有する>[Organizational]組織力やチームワークを高めるという参加型学習に必要な3要素を循環的に「場」に提供するという原則である。ワークショップの設計にも評価にも使える便利な3つの視点だ。

さが そうへい

1961年生まれ。民間の市場調査会社、地域計画・地域振興系シンクタンクの研究員を経て1995年に独立。まちづくり・環境教育・博物館を統合した「エコミュージアム」というテーマを掲げてプランナー&ファシリテーターとして活動し、2003年にNPO法人環境文化のための対話研究所(IDECK)を設立。同代表理事。http://www.npo-idec.com/

一挙公開！シナリオづくりのAtoZ

A B C

～ESDを軸に原体験から未来までも共有

第一回ワークショップ ESDってなんだろう？& お互いを知ろう (37ページ)

A 進行はフリップボード・ディスカッションで



第1回のワークショップは、このプロジェクトでの共通目標をもつとともに、お互いの教育分野を理解することが最大の目標である。当日は、本プロジェクトのねらいやすすめ方を確認した後、ファシリテーターの嵯峨さん、福田さんの進行で、フリップボードディスカッションを行った。フリップボード・ディスカッションとは、ファシリテーターの問い合わせに対し、参加者全員が手元のフリップボード（今回はA4の裏紙）にキーワードを記入し、それをみせながら発表するという方法。フリップを壁に貼りだしていくことで議論の経過が一目でわかるのだ。



フリップボードディスカッションの流れ

- (1) 自己紹介（団体名、教育分野）
↓
- (2) 私が○○教育にかかわり始めたきっかけ
↓
- (3) ○○教育の代表的な教育活動（プログラム）
↓
- (4) 私が○○教育で伝えたいメッセージ
↓
- (5) 私が考える○○教育の課題
↓
- (6) 私がシナリオづくりワークショップに期待すること



B 價値観を共有するための質問



「私が○○教育で伝えたいメッセージは？」——4つ目の質問が参加者へ提示されたとき、フリップにはとても印象的な言葉が並んだ。そして、○○教育で大切にしている「思い」が、それぞれの言葉で語りだされていく。3時間半のワークショップで、お互いの価値観への共感がもっとも高まった瞬間だった。

「共生（=持続可能社会）を実現するためのチエ〈人権基準・思想〉」（人権教育・前川さん、18ページ）、「役割（いろんな生き方があるよ、素の自分を活かしてワクワクするような生き方をしよう！）」（キャリア教育・朝山さん）、「あなたの可能性（の存在）」（環境教育・内村さん、23ページ）、「人間が生きるとはどういうことを自然—人間の関係性（いのち・暮らしの共同性）を通じて伝えたい」（食農教育・清水さん、15ページ）……。

それぞれの言葉は、すべてが持続可能な社会、そのための人材育成にとってとても重要な視点が含まれていて、多くは分野を超えて共有できる内容だといえるだろう。



最後6つ目の質問で、このプロジェクトへの期待を語り合い、初回のワークショップは終了。参加者は、これからはじめる他分野からの学び合いを楽しみにしていた。同時に、ESDを実施していく具体的なシナリオづくりにも意欲的だ。初回のワークショップはお互いの顔合わせ以上に、参加者同士がお互いの価値観を認め合い、このプロジェクトへの期待を高めたものとなった。



■第二回～第四回ワークショップ ESD につながる「大きなシナリオ」づくり (38 ページ)

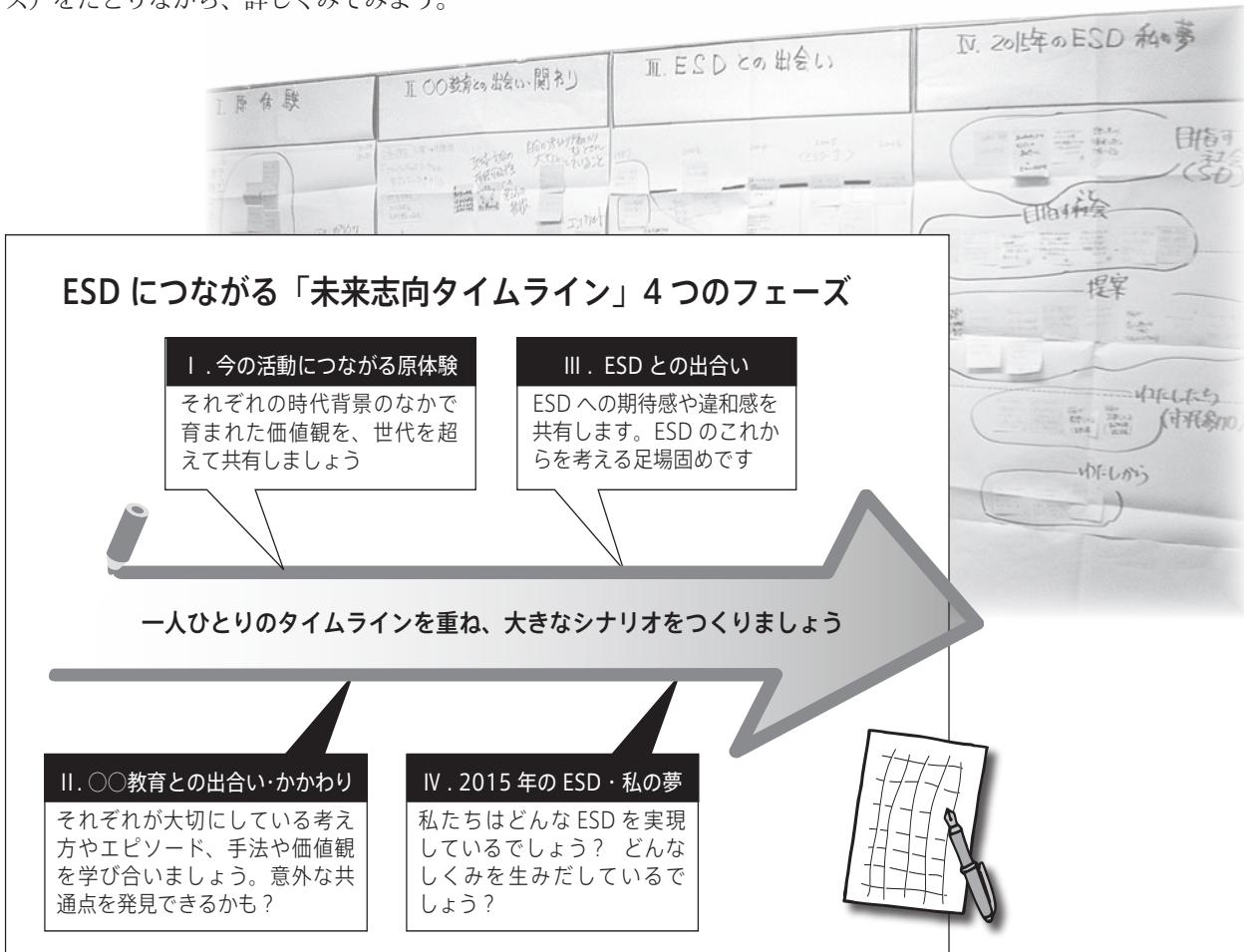
C 全員で大きな年表を作成

第二回から第四回のワークショップでは、それぞれの教育活動につながる原点、出会い、今、そして未来を語り合うことで、ESDに向かう「大きなシナリオづくり」に取り組んだ。ここでの作業の中心は「未来指向タイムライン」づくり。参加者一人ひとりが○○教育およびESDとのかかわりをみつめなおし、生まれてから2015年まで、未来を含めた自分史を書き起こす。そのエッセンスを「聞き書き」という方法で抽出し合い、全員で大きな年表(=タイムライン)を作成。これを眺めながら、ESDにつながるさまざまな教育のこれまでとこれからを共有しようという作業である。



第二回のワークショップでは、「私と人権教育とのかかわり」をヒューライツ大阪の前川さんから、「私と自然保護教育とのかかわり」を日本自然保護協会の志村さんからじっくりうかがい、年表形式のタイムラインを作成。第三回は「清里ミーティング」の参加者もまじえ、全員参加型(参加者全員が自分史を語る)で、改訂版タイムラインづくりに取り組む。そして第四回、もう一度プロジェクトメンバーだけで全員参加型で作成したのが、写真のタイムラインだ。

では、この全員参加の自分史づくりの過程を、ワークショップで行った4つの段階(フェーズ)をたどりながら、詳しくみてみよう。





D フェーズI 今の活動につながる原体験

それぞれの教育活動につながる原体験には、「豊かな自然のなかでの遊びや暮らし」「貧しさのなかでの暮らしの工夫や思いやり」「高度経済成長のなかでの自然破壊」「学生運動や反戦フォークソング」「みんなと一緒にやないことへの小さな劣等感」「性別を理由にした不当な扱い」「学びを見守る温かいまなざしをもつ教師との出会い」など、多様な体験があげられた。高度経済成長のワクワク感を共有しつつも、社会が生みだすひずみに出会ったときの違和感、それに立ち向かう活動に触れたときの高揚感は、多くの人々と共有できるものではないだろうか。



E フェーズII ○○教育との出会い・かかわり

直接的に○○教育にかかわったきっかけは、ボランティア活動や就職などが主だが、その動機として、戦争や書籍との出会いがあげられた。『ブルントラント報告』『被抑圧者のための教育学』『開発のための教育』……、みなさんが大切にしている書籍は他にもたくさんあることだろう。それらを一覧にすることも、ESDの根っこを共有する興味深い活動になりそうである。

そしてここでは、○○教育のなかで大切にしている「方法」や「価値観」についてのキーワードもだされた。「野外活動」「自分の目・体でしっかりみる」「自分たちで分析・調査する」「地域に根ざした食育」「参加型学習」「人をとおして、身をもって知る」「エンパワメント」。自然保護教育は70年代からアンチ効率化、西洋式教育への疑問などを主張してきたこと。福祉はこれまで考えられてきた、支援を必要とする限られた人のためのものではなく、「ふだんの・くらしを・しあわせに」するために、すべての人の問題としてとらえなおそうとしていること、なども紹介された。

教育の方法と価値観は不可分である。これらをもっと掘り下げて学び合うことで、連携してESDに取り組むことの意味や可能性をみつけられるのではないかと思われる。



F フェーズIII ESDとの出会い

ESD的な考え方との出会いは、1987年のブルントラント報告や、90年代の市民による環境計画づくりをあげる人もいたが、具体的にはヨハネスブルグサミットやその後のESD-J設立の動きへの参加がきっかけとなっているようだ。ここではESDと出会ったときに感じた違和感や期待感について話し合った。

「ESDは環境分野の話じゃなかったのね」。これは全国社会福祉協議会の河辺さん(16ページ)がニュースレターでESDを扱ったときに、取材ではじめて発見したこと。「持続可能な開発」というと環境分野のイメージが強く、福祉分野の人には関係ないと思われがちだという。ジェンダーに取り組む太田さん(19ページ)は「長くなるけど、私は『公正で持続可能な社会をつくるために』と言い換えて、ジェンダー、人権、福祉などの視点の重要性を強調しています」とのこと。

一方、日本自然保護協会の志村さん(14ページ)は「自然保護のあり方を考えなおすピッタリの言葉」と歓迎したそうだ。手つかずの自然を大切に守るだけではない、人の暮らしとの関係のなかでの幅の広い自然保護のあり方を普及するために「ESDは使える!」と志村さんは考える。もちろん「開発」という和訳に反発を感じる人も多く、「持続可能な開発」のイメージはさまざまなのが現状。ESDが広がっていくためには、分野を超えてイメージをだし合い、わかりやすい日本語を創っていく必要がありそうだ。そして、「ESDが大切に



している〇〇の部分を〇〇教育は担っている」という役割りがみえてくることが、〇〇教育とESDをつなぐためには必要ではないか、ということが話された。

また、「私は教育という言葉に引っかかります」と発言したのはボーイスカウトの吉村さん(27ページ)。教育は「教える—教えられる」というニュアンスが強く、ESDには「学び」や「学習」のほうがフィットするのではないかとの意見だ。ユネスコの「学習権宣言」(1985)にある教育のとらえ方は幅広く、学校外での学習や、さまざまな活動をとおした学びなども入っている。ESDの"E"もそういう広義の教育だと伝えていく必要があるだろう。例えば北九州市の公害克服の歴史は婦人学級から始まったが、このような過去の経験をESD的に読みなおすことで、社会教育・生涯学習におけるESDのイメージを示すことも効果的かもしれない。



G フェーズⅣ 2015年のESD・私の夢

「一人ひとりの幸せがベース」「お互いの弱さを認め合えることで、いじめや虐待が減っている」「多様性が尊重されている」「若者と南の人が希望をもてる」「自分たちの未来を自分たちでつくることが楽しいと思える」「市民参加が実現している」など、さまざまな未来像があげられた。そして、それらを実現していくために「さまざまな社会運動が互いに敬意を払いつつ視野を拡大する」「あらゆる年齢層や文化・社会的背景を超えて学び合う」「環境・開発・平和・人権をつなぐネットワークを拡大する」「小・中・高校でESDを正式な科目にする」「市民が教育・政策をつくる」などが提案された。

課題は、めざす社会像と現在の取組み状況とのギャップが大きく、その間をどう積みあげていくのかがみえていないこと。ESDをたんなるキャンペーンで終わらせるのではなく、法律や政策を変えていくこともターゲットにしたい、という意見を皮切りに、なにを実現すべきかについて議論が続いた。



過去の国連キャンペーンで実質的な成果があがったことの一つに、「国際障害者年(1981年)」から障害者権利条約(2006年)づくりにつながる運動がある、と指摘したのはヒューライツ大阪の前川さん。「完全参加と平等」を求め、障害者は助けてあげる存在ではなく、地域とともに生きる仲間である、その理念を教育の世界で体現するためにすすめられたのが普通学級への障害児の受け入れ促進だった。ESDでは市民活動や地域活動と学校教育や社会教育をつなぐことが大切だと、多くの人が指摘している。例えばそれを制度化することはできないだろうか。



福祉教育の分野では、地域の社会福祉協議会が学校と連携してすすめている。しかし一部では、車椅子の試乗や高齢者の疑似体験といった単発のイベントに終始したり、「かわいそうな人を助けてあげる」といった弱者救済の福祉観がみられ、「いろいろな人がいる地域で自分たちの暮らしを豊かにするために、みんなで考え方でいくこと」を実現するのは簡単ではないとのこと。ただ、社会福祉協議会が広く生活課題に取り組んでいくことで、ESDという観点から、学校と地域の多様な社会資源をつなげていく可能性をもっている、という期待が膨らむ発言もあった。

*** *** ***

時間をかけ、方法も試行錯誤しながら取り組んできた「大きなシナリオづくり」であったが、互いの教育活動だけでなく、参加メンバー同士の人間まるごとを理解する機会にもなった。ここで育まれた関係性がベースとなって、「あの人と組んでみたいな」「この分野のことを学びたいな」という「小さなシナリオづくり」へつながる動きが生まれることを期待している。



■ 第五回ワークショップ ESD を広げる「小さなシナリオ」づくり (41 ページ)



【チームづくりの 4 ステップ】

- (1) これまでの印象で、興味をもった相手を選ぶ
- (2) 教育手法、対象者などテクニカルな関心から相手を選ぶ
- (3) 将来目標や価値観を共有できそうな相手を選ぶ
- (4) これまでの組み合わせを勘案し、最後に誰とペアに？



H 即席のタスクチームづくり

最後のワークショップは、いよいよ ESD のプログラム試作（小さなシナリオづくり）。まずは、4 つのステップでチームをつくっていった。

- (1) 今までの印象で興味をもった人をカードに書き、そのカードをみせながら、名前のあがった人同士が有機的にグループをつくり、興味をもった点について話を交わす。続いて、
- (2) 教育の手法や対象者などのテクニカルな関心にそってグループをつくり、1 回目と同じように、なぜ興味を抱いたのかを話し合う。そして、(3) 将来の夢や目標をという観点で相手を選びグループをつくる。

これまでのワークショップで得た共通の感覚を確かめるように、または不足を補うように、有機的なチームづくりがすすみ、そしていよいよファイナルアンサー。今までの組み合わせを考慮して、最終的に組みたい相手をあげ、試作づくりのチームができあがった。できたチームは以下の 3 チーム。とても個性的なチームが誕生し、その後の小さなシナリオづくりにも期待が高まった。

【完成 3 つのチーム（敬称略）】

チーム A 人権教育：前川、食農教育：清水、環境教育：若林、青少年育成：吉村、ファシリテーター：嵯峨

チーム B 環境教育：安西・志村・内村、国際理解教育：長倉、ESD-J：村上

チーム C 環境教育：渡辺、青少年育成：片岡、ジェンダー教育：太田、ファシリテーター：福田



I プログラムをデザインする

プログラムの「対象者」や「ねらい」「内容」などを記入するためのフォーマット（42 ページ参照）を配布し、プログラムづくりがスタート。各チームともお互いの教育に関する考え方や経験などの意見を交わしながら、なにが可能なのかを探っていた。しかし、分野を超えて、お互いのめざす姿を重ねながら、イメージを具体化することは、それほど簡単な作業ではない。どのチームも作業を楽しみながらも、最後にプログラムへと落とし込む場面では苦労をしているようだった。

チーム A では、「食」というキーワードから、食の安全性の問題や、生産性だけを求めて失いつつある日本の農業、季節や地域性を失った食文化などを切り口とした ESD が議論される。

チーム B は、日本ユネスコ協会連盟の幅広い活動領域（29 ページ）について耳を傾けながら、環境教育と多文化理解に関する教育プログラムの可能性を探っていく。

チーム C は、環境教育におけるジェンダーの問題を認識し合ったり、まだまだ啓発・講義が多いジェンダー教育についても話題が及んでいく。

そして、休憩をはさんで約 1 時間 30 分。非常に限られた時間ではあったが、即席の ESD プログラムの「芽」となるものが 3 つできあがった（次ページ、30 ~ 35 ページ）。



▼小さなシナリオ 1
「食から ESD を考える」(チーム A)

対象・人数 市民 (子ども～大人)
目標 食に季節感を取り戻す
食の安全性に対する理解が身につく ほか
主な内容 1年を通じて、エコロジカルな食の歳時記をつくる
人権教育:前川実、食農教育:清水悟、環境教育:若林千鶴子、青少年教育:吉村聰、ファシリテーター:嵯峨創平

▼小さなシナリオ 2
「あそび探検隊」(チーム B)

対象・人数 小学校 高学年
目標 持続可能性を視野に入れた「ものづくり」に関心をもつようになる ほか
主な内容 今の遊びについて考え、昔の遊び、自然の遊び、海外の遊びを体験しながら昔の生活・文化や海外の子どもたちの暮らしなども学ぶ。最後に、環境に負荷をかけないオリジナルの遊びを創造する
環境教育:安西英朗、志村智子、内村美紀、国際理解教育:長倉義信、ESD-J:村上千重

▼小さなシナリオ 3
「ジェンダーアイエローカード」(チーム C)

対象・人数 指導者
目標 普段意識していない価値観を知る
多様な考え方を知る ほか
主な内容 環境教育や青少年育成など、参加した指導者が実践する教育の「ある場面」を再現。これまでの指導のなかで、ジェンダーの視点からみて問題と思われる発言や行為を第3者がチェックしてイエローカードやレッドカードをだし、指導者間でジェンダーについて学び合う
環境教育:渡辺峰生、青少年育成:片岡麻里、ジェンダー教育:太田まさこ、ファシリテーター:福田寛之



3つの ESD の芽



J まずは ESD-J での他者理解・異文化理解を

当初、このプロジェクトは地域で ESD をすすめる教育関係者のヒントとなるシナリオをつくりたい、という思いでスタートした。事務局も手探りですすめてきた感が強く、どんな成果が生まれるのか、時間を割いてもらつただけのものを参加者へ返せるのか、期待と不安に包まれた半年間だった。しかし、終わってみると、ESD の可能性をおおいに感じるとともに、むずかしさも実感した半年間だった。

参加いただいた方のコメントをいくつかご紹介する。

- ★ 「(このワークショップでよかったです) さまざまな分野の活動が SD (持続可能な開発)に向けて相互補完していることを再確認できた」(自然体験活動推進協議会 内村さん)
- ★ 「私自身のなかでの ESD の理解は向上したかと思われます」(日本ネイチャーゲーム協会 渡辺さん、24 ページ)
- ★ 「他分野での考え、共通点などが刺激になり、一緒に考えていくプロセスこそ ESD かなと思いました。自らの団体にここで得たことをフィードバックしていきたい」(ボイスカウト日本連盟 吉村さん)
- ★ 「ESD メンバーでさえも他者理解・異文化理解がすすんでいないのが現状。このようなワークショップはもっと必要」(日本環境教育フォーラム 若林さん、22 ページ)
- ★ 「各人の原体験をだし合う方法が、〇〇教育の意義を超えて相互理解をはかるうえで非常に有効だった」(農山漁村文化協会 清水さん)



最後に、お忙しいなか、本プロジェクトに参加いただいた各教育分野のみなさん、そして事務局の無理難題を常に前向きにとらえ、内容の濃いワークショップを実現していただいたファシリテーターの嵯峨創平さんと福田寛之さんにお礼を申し上げる。そして、ESD-J 会員のみなさん。これまで一緒に活動したことがなかった異分野の人々が、ESD の 10 年をきっかけに、相互理解を深めながら新しいものを生みだしていく。そんな共育の場をみなさん地域でもつくってみてはいかがだろうか? このシナリオづくりプロジェクトの手法が参考になれば幸いである。



一挙公開！ ワークショップの成果、3つ

ここからは、シナリオづくりプロジェクト特集の後半戦。6カ月に渡るワークショップの具体的な成果を、誌面にて一挙に公開しよう。お好きなページからどうぞ。

その1 私が描いた大きなシナリオ

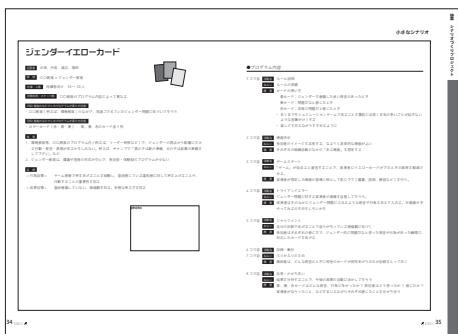
check 13ページ



ワークショップに参加した各メンバーの書き下ろし原稿。他の教育活動の歴史や実践をじっくり学んだのは、みなさんはじめての体験だ。他分野の活動のどこに新鮮な驚きや共感を覚え、自らの教育活動にESDをどうとり入れていけると感じたか？

その2 試作！ 小さなシナリオたち

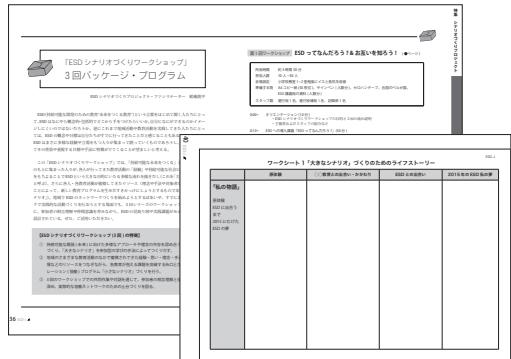
check 30ページ



メンバーが3つのグループ分かれて作成した、「小さなシナリオ」たち。荒削りではあるが、「エンゲイ」「「あそび」「食」をキーワードに、異分野の教育活動にて培われてきた複数の視点やアプローチが、プログラムにしっかりと溶け込んでいることに注目。

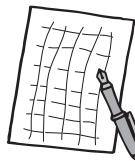
その3 ESDシナリオづくりワークショップ「3回パッケージ・プログラム」

check 36ページ



どこでも誰でもできるようにと、ファシリテーターの嵯峨創平氏がシナリオづくりプロジェクトをパッケージ化。このワークショップがたくさんの地域で行われ、未来に向けた「大きなシナリオ」と、キラキラと輝く無数の「小さなシナリオ」が生まれることを願って。

私が描いた大きなシナリオ



環境教育 <自然保護>

自然保護にも平和運動にも必要な「多様性の安定性」

(財) 日本野鳥の会 安西 英明

同会主任研究員。サンクチュアリの初代レンジャー、現在は東京学芸大学非常勤講師、苫小牧観光大使など



環境教育とは……

当会は自然保護団体なので、「教育」を事業名として使うことは多くないが、「環境教育」という言葉については、1981年に苫小牧市のウトナイ湖サンクチュアリを開設させたさい、「サンクチュアリとは、環境保全と環境教育の場である」として使い始めた。1992年、サンクチュアリのレンジャーで執筆した本のサブタイトルは「自然解説・環境教育の実践」とした。また、1998年から展開した「バードウォッチング案内人研修会」の「手引き」では、当会の理念と環境教育の位置づけを説き、「自然認識の基礎」という章でキーワード「多様性と関連性」「共生と循環」をあげた。その後、安西が自然体験活動推進協議会(CONE)の理事となり、共通カリキュラム作成では、「自然の理解」のなかで「共生と循環」を活かすことができた。

■自然からの学びは人や社会のとらえ方に通ずる

社会問題に関心をもちだしたころ、フォークソング創世期の影響を受けたので、反戦運動や差別問題などを考え続けてきた。ただ、活動としては学生時代に始めた自然保護関連のボランティアを経て、その道が職業となった。

自然とのつきあいで学んだ「目にみえないつながりを見る」、いわば時間軸と空間軸でものごとをとらえる観点は、人の見方、社会の見方ひいては社会問題のとらえ方でも重要で、そもそも、生物としてのヒトの知識や自覚がないまま社会や哲学が論じられていることが片手落ちではないか。自然保護には、生態学でいうところの「多様性の安定性」が必要で、私は平和運動と同じ地平で自然保護を考えてきた。ESDへの参画に関しても、ESDという大きな流れのなかに改めて自らの活動を位置づけただけのこと。今回のワークショップでは、他の参加者の取組みを伺って、分野はちがっても同じ地平で活動してきたはずの方々と改めて、ESDという最大公約数が確認できたという点でよかったです。

■「いかにわかっていないか」がわからない という問題

ワークショップの最中に鳥インフルエンザの質問を受け、

「強毒性鳥インフルエンザという家禽の病気と野鳥がもつウイルスとが混同されて報じられている」「専門家が事実にもとづかない発言を繰り返している」「誤解による風評被害」などの問題を指摘しておいたが、根本問題として、多くの方が「いかにわかっていないか」をわかっていないという背景があり、ESDに取り組む観点としても見逃せないと考えている（わかっていることには限りがあり、わかっている範囲をどのように確認・共有し、検討していくか）。

「命は大切」「自然は大事」だけでは立ちゆかないという事態について、ワークショップのなかでは、当会の「ひなを拾わないでキャンペーン」の紹介とともに指摘しておいた。「巣立ち直後の野鳥のひなを迷子と勘違いして手をだしてしまう、やさしさゆえの誘拐」を減らすためのキャンペーンだが、持続可能性を理解するのに不可欠と思える自然のしくみ、たとえば「命の原則は他の食物になること。そうでないと、共生や循環はありえない」という解説も加えるようにした。

ワークショップ以後の期待としては、作業中に「想像力」や「遊び」というキーワードがでたこと。自身の著作や講演では「地球にやさしい娯楽」「持続可能な楽しみ方」を提唱しており、化石燃料を多量に消費するエコツアーより、負荷の少ない楽しみ方を広げるシナリオをつくっていきたいと考えている。

環境教育 <自然保護>

究極の目標はとてもよく似ている

(財) 日本自然保護協会 (NACS-J) 志村 智子

日本自然保護協会環境教育担当。白神や知床の保護業務アシスタント、会報『自然保護』編集を経て現職



自然保護教育とは……

半世紀以上、日本の自然を守る活動を続けてきた NACS-J では、つねに環境教育・政策提言・調査研究の 3 つのアプローチを大切にしてきました。NACS-J の環境教育の主軸になっているのが、自然観察指導員というボランティアの養成です。自然を豊かなまま次の世代に渡したい。そのためには自然を大切にする社会をつくることが必要であり、自然を大切にする人を増やす。NACS-J では、このような目標をもった自然観察会を地域で行うボランティアのリーダーとともに活動しています。自然観察指導員の養成講習会は 1987 年にスタート、2 万 2000 人以上の方が受講してくださっています。

■人権教育から学んだ学校教育への ネバリ強い働きかけの大切さ

一番強く感じたのは、どの教育分野も、究極の目標はとてもよく似ているということでした。そして、自分たちが続けてきたことはやはり間違っていたなかった、めざすべき方向はこれでよかったのだと力づけられました。

例をいくつか挙げれば、人権教育の歴史からは、学校教育で実現するための長い道のりをお聞きしました。NACS-J では、価値観教育は学校では実現できないと、早い段階で見切ってしまい社会教育にウェイトを置いていたこととの違いを感じ、その努力や戦略は学ばねばと思いました。ジェンダー教育からは、立場が違うと受けとるものがいかに違うか、またそれは一人ひとりで異なるということを改めて考える機会をいただきました。

なお、時間的なご都合から今回は開発教育の方にご参加いただけなかったことは大変残念でした。NACS-J では「持続可能な“開発”」という言葉に違和感を感じました。だからこそ、“開発”をどう理解してきたかをぶつけ合うことを、今後の期待として感じられるようになりました。

■ESD なら多様な人を多様な方法で巻き込める

一方で、こんなに目標が似ていても、それぞれの教育との接点のなさ、というのも改めて気づいたことでした。アプローチが違うので、お互い別の道を歩いていると思っていたのだと思います。

ESD は、「持続可能な未来」という共通の言葉によって得られる、さまざまな教育が同じ目標に向かう多様なアプローチをもつべきだ、ということです。

ローチ、ととらえています。アプローチの違いは、かえって多様な人たちを多様な方法で巻き込むことのできる可能性を示しているのではないかでしょうか。

NACS-J では活動で悩んだときには、つねに「自然にとって一番よいのは?」という基本に立ちかえることにしていましたが、ESD も「持続可能な未来か?」と考える基本の一つなのだろうと思います。

■自然を守るには自然だけをみてはいけない

日本全体の自然を守るためにには、地域ごとの自然が守られなくては成立しません。地域の自然の集まりが日本の自然を、そして地球をつくっています。

また、自然を守るためにには、自然だけをみていたのでは問題はなくなりません。価値観の違う人たちとコミュニケーションをとりながら、自然を守る社会に変えていくことが必要なのです。社会を変えていくには、自然好きだけではなかなか解決しません。その地域で暮らしている、さまざまな価値観をもつ人と共通の目標をもつこと。それは遠回りのようで、根本的な解決策といえるかもしれません。

環境教育においても、自然好きだけが集まって自然のことを考えるのではなく、自然なんていらないと思う人たちとも接点をもったり、自然を別の視点から考えてみることが、自然を守るために重要なことだと思います。今回出会った、さまざまな教育分野のみなさんと、今度は保護問題の現場や地域の環境教育の現場でお会いしたいと思っています。同じ目標にすすむためには、道は一本ではなく、たくさんあったほうが、きっと大勢の方が早く行き着けるはず。そんなことを感じています。

食農教育

ESD は〇〇教育の自己変革を促すく導きの糸>

(社) 農山漁村文化協会 清水 悟

出版による文化運動団体(=農文協:略称)で、文化活動に従事しつつ、『農村文化運動』『食農教育』などの雑誌を編集



食農教育とは……

「食農教育」とは農文協がつくった造語で、自然の力を熟知した根源的な生活者である農家などの協力を得て、地域の自然と農と食をそのつらなりにおいて体験することによって、人間の生活の基層にある物質代謝と生活文化(そこにある歴史通貫的な「自然と人間」の関係)を学び、そこから現代社会の歪みを逆照射しつつ、自然と人間の関係・人間と人間の関係を修復し、暮らしそよい持続可能な地域を形成してゆく力をつける総合的な学習。地域づくりをとおした大人自身の学習と一体的に把握される。

■人権問題をせまくとらえていた

今回のプロジェクトではさまざまな〇〇教育に出合い、自分の無知を知らされると同時に、各教育が隣接したり重層したりしていることに気づかされた。たとえば前川実氏(アジア・太平洋人権情報センター)からは、人権問題を自分がせまくとらえていたことを教えられるとともに、貧困問題と開発と人権の関連性を知り、福祉と人権の関係や、国際開発協力と農業技術開発における実学の意味についても考えさせられた。そして私が関係する食農教育では、志村智子氏(日本自然保護協会)の「自然と人間の関係を読みとり、暮らしを根本からみなおす」という発言や、安西英明氏(日本野鳥の会)の食物連鎖を学習することの重要性の指摘などに触発された。食の安全性問題を生存権から位置づける前川氏のとらえ方も新鮮だった。

また、これらの発言に触発されつつも他方では、持続可能な地域づくりという視点から、近代化やグローバリズムと過疎問題、都市生活者の帰農問題が議論されてもよいと思った。

以上のように、各種教育に造詣が深いすぐれた人々と協働して、相互に補完し全体像を描きつつ視点を深めていけば、体系的に奥の深い内容のESD学習プログラムを開発できるのではないかと予感した。それが本プロジェクトの第一の成果だったと思う。

■ ESD が提起する新しい世界像

ESDに出会ってすぐ浮かんだ言葉は「オルタナティブ」である。人類を解放すると喧伝された社会主義の挫折や、

それに代わるものとして一時期期待された市場原理主義的資本主義が生みだした閉塞状況を目の当たりにするなかで、自然と人間が調和し、コミュニティが再生し、世界の人々の生が充実する新しい世界像を提起してくれた。農文協は、人為と自然を統一的に把握し近代の矛盾克服をめざして文化運動を築いてきたが、その運動がオルタナティブな国際的運動の潮流と軌を一にしていることを知って、大いに励まされた。

■地域の「主要矛盾」と「必要」から課題を立てる

ESDは包括的概念であって、その中身を固定的・実体的にはとらえられない。各教育が独自性を失うような形でESDと自らを一致させることが求められているのではない。そうではなく、〇〇教育が自らの運動を創造的に永続させていくうえで必ず求められる不断の自己変革のく導きの糸>としてESDをとらえ、ESDに結集しつつそれぞれの契機で自己変革をすすめることである。その自己変革の牽引役が、環境・経済・社会、そして文化を統一的に把握するESDの、抽象的ではあるが普遍性をもったさまざまな概念であり、ESDに結集した他の〇〇教育との間でなされる相互啓発だといえるのではないか。

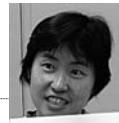
また、この自己変革の場は観念の世界ではなく、リアリティのある「地域」だと考えたい。多元的中心のネットワークを地域で結び、広くて深い視野で地域の「主要矛盾」と「必要」を掘り下げるなかから地域課題を明確にする。そして世界を、国家ではなく、自分らと同様の、しかし多様な個性的地域の集合として考えてみる。そこから、公正で持続可能なくもう一つの社会>形成の第一歩が始まると思う。

福祉教育

誰かのための福祉から、当事者としての福祉へ

全国社会福祉協議会 全国ボランティア活動振興センター 河邊 裕子

地域と無関係に生活していることに日々反省です。まずは子どもの小学校のPTA活動から始めるべきか……



福祉教育とは……

社会福祉協議会は長らく福祉教育に取り組んできた。福祉教育は車イスや高齢者の疑似体験に終わるものではない。なにを「福祉」としてとらえるかによって、「福祉教育」のみえ方は大きく異なってくる。福祉を平たくいえば、「自分たちの日々の暮らしをよりよいものにするための取組み」である。「自分たち」とは老若男女、障害の有無、文化の違いのほか、あらゆる差異を超えた市民一人ひとりであり、「暮らし」は経済的・文化的・社会的・精神的な種々の構成要素が個人の日常生活のなかでバランスよく満たされていることが求められる。それらを阻害する社会的な課題があれば、市民自らが連帯しつつ主体的に取り組んでいくことが、これから市民社会では重要であり、そうした主体的な市民となるための学びが「福祉教育」である。

■福祉の視点とは“より弱いものへのいたわりと共感”

今、「〇〇にやさしい」というフレーズが社会にあふれている。「地球にやさしい」「人にやさしい」……などなど。大まかに言えば、「やさしい」ことが持続可能な社会につながっていくという認識なのである。そして、どのように「やさしくするか」を教えることがさまざまな教育活動であり、その共通理念としてのESDだと思われる。

「やさしさ」の基本は、この地球にともに生きるものとして、より弱いものに対するいたわりと共感ではないだろうか？それを私は福祉的な視点ととらえるのであるが、あらゆる教育に福祉的な視点をみいだすことができる。または、みいだされなければならないと思う。それぞれの教育分野によって、「より弱いもの」が自然環境であったり、動植物であったり、女性（男性）だったり、文化的な背景の異なる人たちであったりする。

それぞれの教育活動に接して感じる力強さは、目の前にある課題に当事者としてかかわるがゆえの、明快な課題意識と具体的な説得力であろう。福祉教育は、ときに「どこかにいるなにかに困っている誰か」の問題になりがちである。福祉教育は、あらゆる市民一人ひとりが当事者であるという意識をとり戻さなくてはならないと思う。

■福祉的な視点をあらゆる学びの基礎におく

福祉的な視点はあらゆる学びの基礎にあり、それゆえに福祉教育も多様な教育活動とつながることが期待できる。例えば、資源のリサイクル活動をすすめるさいに、どう

してもゴミを分別せずに捨てる人がいるとする。怠惰なだけ？ 環境保護に無関心だから？ でもその人のことをよくよくみてみれば、大きな課題を抱えていてそのこと以外に気を配る余裕がない、高齢や病気で判断力や気力が減じている、日本語の理解が不十分な外国人で分別方法がよく理解できない、といった課題がみえてくることもある。

そのとき、隣人である私たちはなにをするのか、が問われてくるのだろう。隣人として心を通わせることでその人の孤独が癒されたり、適切な相談機関につなげができるかもしれない。小学生がごみの収集日に合わせて高齢者宅のごみを集積場にもっていく、日本語の理解が不十分な住民に対して外国語のパンフレットをつくって日常生活を支えるなど、現に取り組まれている活動もある。

■人々の弱さを肯定できる持続可能な社会へ

あらゆる活動の根底に、そして基調に、より弱い立場にいる人の視点が求められている。私たちはみな、なんらかの弱さを抱えており、その弱さを肯定された社会でなければ、真に豊かで持続可能な未来は望めない。

ESDは世界中の人々と自然が豊かに調和しうる社会をめざす多様な教育活動の共通項であり、そのESDの根底に福祉的な視点が求められている。福祉教育の一翼を担う社会福祉協議会において、ESDについての理解を深め、広がりのある学びをつくっていくこと、ESDという共通項によって、福祉教育が環境・教育・国際・人権等幅広い教育活動とつながり、豊かな市民社会をつくっていくための礎を築いていくことが必要である。

平和教育

平和を築く市民の「力」をESDで築きたい

ハーグ平和アピール平和教育地球キャンペーン 浅川 和也

高等学校での教職（英語科）を経て、東海学園大学人文学部教員。平和の文化の実現ための教育をめざしている



平和教育とは……

侵略・加害の事実や原爆・戦災など戦争学習に関して、日本の平和教育には豊富な蓄積がある。しかし、たとえば、環境が破壊されたところに平和な生活はありえないし、いじめに脅かされている子どもにとって平和は絵空事にすぎない。欧米では、環境・開発・人権などを含みこんだ「包括的平和教育」という考え方方が提唱されている。貧困・差別・戦争といったさまざまな「暴力」を有機的にとらえて平和を創造していくという試みは、平和教育を豊かにとらえかえすことになる。平和教育の固有性を追究しつつ、今日の日本と世界の「暴力」を克服する「平和な世界創造の主体」を形成するための平和教育の理論と実践こそが、「21世紀の平和教育」として求められている。（*）

■制度保障あってこそ個人への啓発が生きる ～〇〇教育の共通課題

シナリオプロジェクトに参加して、他の教育活動も時代の動きのなかで変化していることがわかった。学校教育で平和というと徳目的になりがちだが、社会における人権や福祉教育は、具体的な法令や施策の実現のための営みである。「おもいやりがだいじ」という人権への啓発ポスターをみたことがある。人権の課題は一人ひとりを尊重することであるというが、「おもいやり」だけ唱えても片手落ちである。制度保障あってこそその啓発なのである。また自然保護や福祉も社会の制度・しくみを変えていくという、より積極的な動きであり、共通点がみてとれる。平和がだいじ、というのは誰しも合意することだが、より具体的な状況をみていく必要があるであろう。「Marine Go Home」という映画では、矢白別・梅香里・辺野古を結んで軍事による環境破壊、人々への抑圧が描かれているのを思いおこした。

■ ESDから平和教育の蓄積をとらえなおす

学校では、あらゆる教育活動の場、すなわちすべての教科でも平和への道筋が追究されるのだが、学校教育、とくに中学高校では教科の壁が厚い。ESDも同様であろう。地球規模の課題から教室でのいじめへの対処など、教科をつないだ、また学級・学校での取組みを、ESDとの連関での見取り図をつくることができるとよい。そのさい、平和を軸にこれまでの成果を整理することが大切だ。もちろん地域での憲法学習や戦争体験の継承、非核平和都市宣言、平

和博物館などの取組みもある。平和教育については、さまざまな経過から、一定の評価があるので、ESDという新たな国際的水準からの提案によって、これまでの蓄積をとらえなおすことができるであろう。

また平和教育の国際的な潮流として、ベティ・リアドンさんによる仕事を『戦争をなくすための教育』（明石書店）として翻訳した。これは1999年のハーグ・アジェンダの「戦争の根本的原因と平和の文化」「国際人道法・国際人権法と制度」「暴力的紛争の予防・解決・転換」「軍縮・非武装化と人間の安全保障」という4つの柱にもとづいている。ここには環境問題はカバーされていないが、国連安全保障理事会でも「気候変動と安全保障」ということが論議されるようになってきた（2007年4月）。気候変動が紛争を生む危機感からであろう。ESDと平和教育を、相互に発展させることができるとと思われる。

■国家による戦争への対処から 市民による平和への営みへ

戦争が起こるもの、戦争を可能にする社会システムがあるからだ、とされる。ベティ・リアドンはジェンダーとエコロジーの課題を重視し、暴力の文化から平和の文化への転換が必要だという。戦争への対処というと国際政治や外交であり、国家による課題とされてきた。しかし、ハーグ・アジェンダにあるように市民としての平和への関与が求められるのである。政府は国際平和に貢献するために平和構築の担い手を育成することを打ちだした。平和の文化を築くための市民による学習という点では、ESDの内容とともに、プロセスに注目できる。社会の担い手として責任のあ

る市民としての力をつけていくという ESD の原理は、まさに平和教育の今後の課題と合致する。

フィリピンのミンダナオで、軍事介入によって引き裂かれた人々の地域を復興する平和教育の実践を見聞する機会があった。インターフェイス（宗教間対話）教育といわれ

る大きなシナリオに、戦争という最大の暴力の犠牲をしいられた人々のこころを癒していく小さな、そして、ていねいな営みがなされている。私と社会とつなぐ平和教育の実践は、ESD に結集する人々のパーソナルなストーリーと織りなされていくように思う。

*「平和教育とは……」は竹内久頤（東京女子大学）が執筆

人権教育

環境と開発と人権をつなぐ教育プログラムの創造を

(財) アジア・太平洋人権情報センター(ヒューライツ大阪) 前川 実

ヒューライツ大阪 5 年を含め人権 NGO 一筋 30 余年。人権をベースに持続可能な開発を考える教育を模索中



人権教育とは……

人権教育は、部落差別をはじめ民族差別、障害者差別、女性差別などの差別（人権侵害）の現実と向き合い、その解決に向け社会的公正と多文化共生をめざす多様な教育の営みです。そのあゆみは、1950 年代の同和教育運動からスタートし、被差別当事者と教育関係者が立ちあがり、長期欠席・不就学をなくすため奨学金制度や教科書無償制度を創設し、就職差別をなくす取組み、教育内容を創造する取組みを実現していました。そして 1970 年代には人権に関する国際条約の批准もすすみ、障害のある

人への「就学猶予・免除措置」は差別であり、すべての子どもが地域あたり前に保育所や学校に行くことを求める地元校区保障の運動や、在日韓国・朝鮮人をはじめすべての外国籍の子どもへの教育保障の運動も高まっていきました。

1995 年から「国連人権教育のための 10 年」がスタートし、1998 年に人権教育・啓発推進法が制定されて以来、同和教育、在日韓国・朝鮮人教育（民族教育）、障害児（者）教育、ジェンダー（両性平等）教育、多文化共生教育などを総称して「人権教育」という用語が広く使われるようになってきたといえます。

■他分野の実践が参加・体験型学習手法の革新のヒントに

今回のシナリオプロジェクトは、さまざまな視点から ESD に取り組む人々との対話と共同作業がすすむ、有益なものとなりました。私は、ESD を「環境と開発と人権をつなぐ未来志向の教育」ととらえていますが、福祉教育やジェンダー教育や平和教育は、人権教育と共通した視点やアプローチをもっており、その有効性を再認識しました。

また、日本野鳥の会や日本自然保護協会 (NACS-J) などの自然体験を重視した環境教育と農文協の提唱する食農教育には、生態系を守ることの意味（多様性と相互依存性）や動物保護と動物愛護の違い、自然観察を通じて自分の目でみて感じて知識と感性を結びつける学びの大切さ、自然に生かされている私たち人間と自然との関係がみえてくる感性を育てるこの重要性を学びました。また「食」は自

然と人間が一体となることを実感する営みであり、私たちの「食」を支える農（業）のあり方をはじめとする経済・社会システムの関係を食（農）教育をとおしてみつめなおすことの重要性を、新鮮な思いで学びなおしました。

これらは、教室での学びも含めて参加・体験型学習手法のいっそうの革新をめざすヒントとなりました。

■ESD と他の国連教育プログラムとを一体化してすすめたい

国際社会では、人権問題への対応・「人権の主流化」の重要性が再確認されています。すべての分野での人権の視点の重要性が改めて強調され、「安全なくして開発はなく、開発なくして安全はない。両者はともに人権と法の支配に依存する」(2005 年 9 月、国連事務総長報告) とされています。ESD の 10 年と同時進行の人権教育世界プログラム

など他の国連教育プログラムとも一体化し、人権をベースにして環境、開発、平和という地球的課題を相互につなぐ教育の推進をさらにすすめたいと思います。

■ミレニアム開発目標は途上国だけでなく 日本の課題もある

人権教育は、部落差別をはじめ民族差別、障害者差別、女性差別などの差別（人権侵害）の現実と向き合い、その解決に向け社会的公正と多文化共生をめざす多様な教育の営みですから、多様な教育実践と多様な発展段階が全国的にはあります。私は、ブントラント報告（1987年）や子どもの権利条約（1990年）、パウロ・フレイレの識字教育・民衆教育（1990年）やアメリカの多文化教育（1992年）に学びながら、持続可能な地球市民社会づくりをめざす人

権教育を、大阪の地で20年間にわたってすすめました。

これからの人権教育は、これまで以上にグローバルな諸課題に積極的に取り組むことが大切です。今、国際社会はミレニアム開発目標（MDGs）の達成を課題としていますが、これは発展途上国だけの課題ではなく、日本にも存在している課題であるということを、しっかりと訴えていきたい。とくに、自然に生かされている私たち人間と自然との関係を実感させる参加・体験型学習手法や、環境と人権をつなぐ教材開発に力を入れたいと思っています。

2005年から始まった人権教育のための世界プログラム、ESDの10年への発展のなかで、シナリオプロジェクトで出会ったさまざまな分野の教育活動の経験を人権教育関係者にも伝え、環境と開発と人権をつなぐ未来の教育をさらに発展させていきたいと願っています。

ジェンダー教育

ESDにおけるジェンダーの主流化と ジェンダー教育のESD化

（財）アジア女性交流・研究フォーラム 太田 まさこ

同フォーラム主任研究員。専門は、ジェンダー、開発、基礎教育。北九州ESD協議会の事務局として、ESD活動を推進中



ジェンダー教育とは……

男女の性差を表す言葉には、セックス（sex）とジェンダー（gender）があります。セックスとは、生物学上に定められた性差のこと、全世界で共通です。一方ジェンダーとは、男性・女性に定められた、また期待される役割・責任・行動を意味し、社会の経済・政治・環境・宗教・文化・習慣・法律などの状況によって異なり、社会の移り変わりとともに変化します。男性中心の社会では、その権力構造から女性は不利な立場に置かれていることが多いのですが、その状況を「当たり前のこと」と考えている場合、疑問は生まれません。ジェンダー教育とは、このような固定観念に対して「なにか違う」「なにかおかしい」と気づくこと、そして「男だから、女だからこうしなくてはいけない」という「しばり」を解いていくことだと考えています。

■環境教育とジェンダー教育のちがい

ESDシナリオづくりプロジェクトに参加して、さまざまな分野で教育活動を行っているメンバーと5回にわたりESDについて深く議論をしました。同じ時代に生き、共通のできごとを経験しながらも、その受け止め方と反応は人によって異なり、その結果、環境・福祉・人権など異なっ

た分野に、それぞれがかわってきたことがわかりました。

ESDの中心をなす環境教育活動を行っている人と初めて出会い感じたことは、環境教育では、海や山へ出かけ自然現象を観察するなどして、楽しみながら学習し、なつかつ持続可能な開発のための課題の発見やそのために行動を起こすことを促す学習方法が豊富だ、ということでした。一方、ジェンダー教育において、課題は目にみえにくのです。

日常生活で、男女による区別や差別を体験していても、それが本来はされるべきではないと感じる「こころ」がなければ、課題として認識されることはありません。ジェンダー教育というと、「なにかよくわからない」、「自分には関係のないこと」と思われるがちです。また、男性のなかには「自分が批判される場ではないだろうか」と考えている人がいるかもしれません。

さらに、学習方法としては、ワークショップ形式より講義型が主流で、「楽しく学ぶ」というイメージがあまりありません。しかし、実際ジェンダー教育とは、男性にとっても、女性にとっても公正で暮らしやすい社会づくりをめざすもので、1日24時間そして一生涯にわたる身近なことからを扱っているのです。

■すべての教育にジェンダーの視点を…… そしてジェンダー教育を ESD 的に……

今後、ESD をすすめていくうえで、ジェンダー教育には主に二つの可能性があると考えられます。一つは、ジェンダーは横断的課題（cross-cutting issue）とよくいわれるよう、あらゆる分野にかかわっています。ESD とは現在科目別に行われている教育をより総合した形で行おうとい

う試みですが、すべての教育においてジェンダーの視点をとり入れることが可能です。

例えば、子どもが自然体験のキャンプに行きました。「今から、ごはんをつくります。男の子は森から薪を集めて、女の子は野菜を切ってください」という指示がありました。これを、ふつうに聞き流しますか。それとも、違和感がありますか。この発言には、「男の子は力仕事、女の子は料理をする」というジェンダー役割の固定観念が潜んでいるのです。ジェンダーの視点をとり入れると、「今から、ごはんをつくります。薪を集める人と、野菜を切る人に分かれましょう」となります。そんなにむずかしいことではないでしょう。

もう一つは、ジェンダー教育において、他の教育分野から参加型・体験型、そして楽しく学べる学習法をとり入れて、新しい学習方法を開発することです。その点において、第5回の「小さなシナリオ」ワークショップで考えた「ジェンダーエローカード」（30ページ）は、さまざまな教育の場に導入することが可能で、子どもも大人も楽しくジェンダー的考え方を脳にインプットすることができる事例ではないかと考えています。「持続可能」だけでなく「公正で持続可能」な社会づくりを行うために、ESD にジェンダーへの配慮をとり入れてみませんか。

環境教育 <自然体験>

他分野との対話の一歩は 自分のライフ・ストーリーにある

(社) 日本環境教育フォーラム 小堀 武信

大学卒業後は小売業に従事し、環境問題・消費者問題に関心をもつ。退職後、環境教育系の修士課程を経て現職



環境教育とは……

(社) 日本環境教育フォーラムは「環境教育の推進に寄与し、広く国民のなかに環境保全の健全な思想を育むことを目的にする」ことを定款のなかで謳い、自然学校の普及、環境教育の普及、途上国支援を事業の柱として活動しています。

具体的には自然体験活動を担う人材養成、企業とのコラボレーション事業、行政への政策提言や連携事業、国際的な支援など幅広い環境教育活動を展開し、持続可能な社会の構築に向けて取り組んでいます。

■ブルントラント報告は、環境だけでなく人権分野の転機でもあった

ありていに申し上げれば、私は30年近くにわたり、今回のプロジェクトで集まったさまざまな教育分野に対して大きなかかわりもなく過ごし、環境分野の面からものごとをみていました。しかしESDシナリオづくりワークショップをとおして、それぞれの教育分野の転機が同じであり、重なり合っていることに気がつくことができました。

例えばブルントラント報告は環境分野の転機でしたが、同時に人権分野の転機でもありました。これを契機に日本の人権教育が、国内だけでなく世界の差別問題をも視野に入れるようになったこと。また、環境・開発・人権をつなげて、参加・体験型の学習法をとり入れていったことなど、私にとって目からウロコが落ちるような驚きでした。今まで環境分野の視点だけでとらえていた報告・宣言・会議などの成果は、他の教育分野に当てはめても、おどろくほど共有できる概念を有していたのです。

こうした経験から改めて思ったのです。さまざまな教育分野が話し合い、手をとり合うことは可能であると。

■ESDが一般の人々に広まるまでの段階

一方、ESDが市井に広まるにはまだ時間がかかるようにも感じました。九つの教育分野のメンバーが集まったプロジェクトでしたが、当初は、各々の分野から思い入れの強い主張が多少なりともあったと感じています。

しかし、すぐれたファシリテーターのもと合意形成に達することができ、お互いの教育分野を理解した、と私は考えています。はっきりとそれを感じたのは、やはりお互いが共有する部分をみいだしたときでした。そこにいたるには長い時間が必要としました。

相手の立場に寛容で胸襟を開いた対話であるのかどうか。ワークショップにおいて重要なこの姿勢が、ESDをすすめていくうえでもっとも必要なことと考えます。私たちがきちんと合意形成したあと、わかりやすく、かみくだいた言葉でもって、その方向性を市民に示す。そうしてはじめて、ESDは社会に広まっていくのではないかでしょうか。

■環境教育と他分野との連携方法 ～環境と福祉を例に

環境と福祉の分野のコラボレーションでお話をすすめたいと思います。

昭和46年に環境庁が厚生省（当時）から分かれていった経緯からもわかるとおり、環境と福祉の分野はもともと重なり合っているものでした。環境福祉学会のホームページ

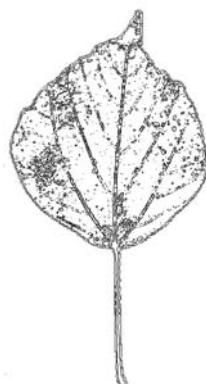
ジを拝見すると、環境と福祉の専門家が一緒に商品を開発する（ユニバーサル・エコデザインの創造）、障害者への環境教育プログラム（セラピーの提供）などの可能性が述べられています。

こうした取組みは、ステークホルダー間の壁を超えた新しいマーケットを創造するもので、消費者満足度が高い商品やサービスの開発に大きく寄与し、教育分野間と経済分野を強く結びつけていくものでしょう。開発した財を市場へ投入するという視点において、教育分野の理念理想と市民のニーズをくみあげた、バランスのとれたマーケット構築を図っていくことのきっかけになるかも知れません。ここでは自分がもつ教育分野の専門知識や経験を生かすことが十二分に可能です。

■ESDにつながるライフ・ストーリーを ふりかえると……

最後に、私の経験です。ワークショップをとおしてマイ・ライフ・ストーリーを改めてふりかえりました。通学していた小学校が日本の赤十字社の活動を展開していたこと、中学生時にボランティア・クラブに所属していたこと、社会人学生時にジェンダーの科目を履修したこと、消費者問題やバイク旅から環境教育に関心をもつたこと、前職で玩具の仕入販売を担当したときに子どもの教育について考えたこと、沖縄や鹿児島旅行で悲惨な戦争の記憶に触れたことなどを次々に思いだしました。ふだんは表面にでていなければかもしれません、自分のなかにあらゆる教育分野の萌芽が内包され、それらがつながっていたことが認識できました。

もし多様な教育分野を含むさまざまなステークホルダーの方々に対して壁があると感じているのなら、自分史をふりかえることであらゆる分野との接点がみいだせるかもしれません。それは相手に対して寛容に、そして胸襟を開いて対話していくことへの第一歩になるのではないかでしょうか。



環境教育 <自然体験>

異なる人が同じ方向に向かうために

(社) 日本環境教育フォーラム 若林 千賀子

同フォーラム理事、若林環境教育事務所代表。山梨県清里在住。20数年前から環境教育活動を行う



環境教育とは……

(社) 日本環境教育フォーラムは1987年から活動している環境NGOです。年々深刻さを増す環境問題。その環境問題を知り、行動に移す人を育てること。そのための「気づき」へのきっかけになる体験や知識を提供すること。それが私たちの考える環境教育です。「自然体験」をキーワードに、行政、企業、NPO・NGOとのさまざまな「つながり」を創りだし、「気づき」の場を提供しています。数年前からは、アジアを中心とした海外での環境教育活動にも力を注いでいます。私たちは、さまざまな活動をとおして、自然と人間がともに持続できる社会の実現のために環境教育を展開しています。

■異なる人どうしと同じ目的に向かわせる手法

今回のワークショップに参加した団体は、青少年育成、福祉教育、人権教育、国際理解教育、平和教育、ジェンダー教育、食農教育、キャリア教育、エネルギーおよび自然保護などの環境教育の分野で活動されている方々でした。これまでこのような分野の方々との交流はありましたが、今回は、「〇〇教育とESDをより具体的に展開するためのプログラム事例をつくる」という目的のもと、毎回ともとて新鮮な「気づき」をいただけました。

ESDの花びらモデル(57ページ下の図)にあるように、それぞれの教育活動の「共通部分」がESDという「記号」であると思うのですが、その「共通部分」とはなにか。これを一般化することは結構むずかしい作業です。今回はその作業の手始めとして、お互いの教育活動の歴史や価値観を共有するというアプローチから出発しました。

それぞれの教育活動の動機には必ずや時代の必然性があり、なにかしら社会にコミットメントしていたこと、そのことを継続してきたこと、創造力の強さと他者と共有することの大切さとむずかしさを体験してきてることを学びました。また、それぞれの教育活動の魅力は、熱い想いを抱いて取り組んでいる「人」がいるということと、どの教育活動にもまだゴールはみえていないが、それゆえに、「これからどうすすむべきか」を一人ひとりが情熱をもって考えているのだと強く感じました。

さらに、自分史づくりともいえる未来志向のタイムラインの作業もありました。「原体験」「〇〇教育との出会い」「ESDとの出会い」「2015年のESD・私の夢」というカテ

ゴリーを埋めていく作業は、純粋に楽しかった！ そして、自分史を他者に聞きとつてもらうことの「恥恥ずかしさ」と同時に、「客観的に自分自身をとらえなおす」こともできました。異なる人どうしが同じ目的に向かうときの「共通理解」を促進し「目的達成」のイメージを具体的に把握するのにこのワークはとても有効で、環境教育活動でもぜひやってみたいと思いました。

■つながることが「持続可能な地域づくり」への第一歩

私自身は、ESDとは「つながり」であり「つながっていくこと」と理解しています。

そのことの具現が、現在の日本で起きているさまざまな社会問題、中山間地域の過疎化や食糧自給率の低さ、食にまつわるさまざまな問題、子どもたちをとりまく教育やこころの問題、高い自殺率、地球温暖化を促進している私たちの暮らしや環境問題、これらのことと解決すること、すなわち「持続可能な地域づくり」の実現であると思います。今回のさまざまなワークや他分野の方々との共有体験は、一見抽象的にみえるかもしれない「持続可能な地域づくり」のために、まず、人と人、異なる人どうしがその人の歴史や価値観を確認し合い、未来のイメージを共有することが最初の一歩として重要であることを、再確認することができました。このことは、人と人とがつながっていることを「実感」し、つながり感を「継続」していくために大切なことだと思います。最初は混乱がついても、ぜひ続けていかなくてはなりません。

■地域や学校で「小さなシナリオ」づくりを

今回、小さなシナリオ（プログラムの展開例）づくりは、時間の関係で十分なレベルに到達しませんでしたが、コンセプトとプロセスはよく理解できました。今後、さらに手法をみがいて、地域や学校などで実践したいと思います。「小さなシナリオ」をたくさんつくり、実施する行為を継続することが重要です。小さなシナリオの実践によって、

「2015年のESD・私の夢」を実現することができると思います。環境教育でも、今までつながっていない分野や人たちともっともっとコミットメントしなくてはなりません。「タイムラインの作成」や「小さなシナリオ」の実践と協働などをとおして、「環境教育」と他の分野とのつながりを少しづつ実現し、それぞれが実感していく。その積重ねが大切です。

環境教育 <自然体験>

プログラムだけでは ESD 的な教育になりえない

NPO 法人 自然体験活動推進協議会 内村 美紀

トレーナー養成担当。特別な活動だけではなく日常生活とつながりのある自然体験活動のあり方が現在のテーマ



自然体験活動とは……



環境教育とは、大雑把な言い方をすれば、地球の自然環境や生活環境、私たちのライフスタイルや経済活動のあり方など、広範囲をテーマにして展開される ESD 的な教育です。環境教育の定義も内容もじつにさまざまですが、自然体験活動推進協議会 (CONE) の会員団体が行っている活動の多くは、実際に自然のなかで自らの体を使った体験です。

具体的には、例えば山ならば登山、海ならば磯遊びやスノーケリング、ビーチコーミング。川ではカヌーや生きものさがし、森では木登り、きのこなどの採集、森づくり体験。里山では農業体験や、田んぼで米づくり、などの多岐にわたる活動があげられます。また、近所の公園のような身近なところでは自然観察をしたり、室内で地域のお年寄りや大人から、昔遊びや伝統工芸、郷土料理、木の実などを利用したクラフトのつくり方を教えてもらったりする活動もあります。

ここで私たちが大切にしていることは、それらがただたんに楽しかったというだけの一過性の活動で終わらないこと。これらの自然体験活動をきっかけに、参加した一人ひとりが自然や人のつながりや生かされている自分に気づき、学び、自分も他者（地球に共存するすべてのもの）も大切にしたいという気持ちを育むきっかけになること。そして、それが自分の住んでいる社会で責任ある市民としての生き方・行動につながっていくことをめざしています。これらはまさに ESD のエンセンスですが、そのような視点をもって行動できるように支援することこそ環境教育、いいかえれば ESD 的な教育であると考えています。

■参加者の原体験に共通してあった 自然体験や仲間・地域とのふれ合い

私がもっとも興味深かったのは、○○教育にかかわる方たちの原体験、原風景の話です。さまざまな○○教育に熱心に取り組まれている方々のこれまでの経験や歩んでこられた歴史のなかで共通してみいだされたのは、幼少期の豊かな自然体験と、今にいたるきっかけとなる人との出会い

でした。

ワークショップのメンバーは年代もさまざまでしたが、どなたもその時々で今よりはずっと豊かだった自然のなかで遊び、言い換えれば自然体験をされ、その遊びには必ず仲間や地域の人とのコミュニケーションがありました。また、地域・学校・海外（旅先やスタディツアなど）での人との出会いがきっかけとなり現在の活動にいたっている方がたくさんいらっしゃいました。

これらの話を伺ってあらためて思うのは、人をつくるのは人であるということです。ESD的な教育をどう実践するかを指導者の立場で考えたとき、私たちが大切にすべきことは、プログラムをきっかけや材料にして私たち自身が参加者たちとどんな出会いや関係をつくりだせるか、どんな支援者になれるのか、という問い合わせではないでしょうか。

■指導者に求められる市民性・人間性・ESD的視点

私たちは、自らの活動をESD的な教育にするにはどうしたらよいか、とつい目前のプログラムについて議論をしがちです。活動の目的・目標を定め、それをより効果的に実施するための手段としてのプログラムは有用です。しかし、確立されたプログラムを展開すればESD的な教育になるわけではありません。

ESD的な教育のプログラムに必要なのは、そのプログラムにESDのエッセンスが展開できるようなしかけがあるかどうかです。プログラムの内容や展開方法、手法は重要ですが、カギを握るのはそれらの活動を支援する指導者の資質にあるのではないかと思います。指導者の知識や技能はもちろんですが、それに加えてその人の人間性や市民性、ESDへの視点がなければ、せっかくのプログラムも一つの点としての活動にしかなりえません。

このように考えると、私たち指導者が最初に考えるべき

は、どのようなプログラムを行えばESD的な教育になるかではなく、私たちが実施しているプログラムを指導者がESD的な視点で支援できているか、ESDのエッセンスのないようにどのようにプログラムに盛り込み伝えたいのか、育みたいのかを明確にすること。さらに、プログラムを展開する指導者の力量が重要ではないかと考えます。つまり、指導者には継続的な技術や知識の向上は当然のことながら、参加者の興味や関心を引きだし、学びが広がる空間を提供できるよう支援する力、参加者に寄り添える姿勢を培っていくことが求められます。

■他者と連携するコーディネート力も養いたい

しかし、完璧な指導者はいません。だからこそ、もう一つ重要なことは、自分や団体の特性（強みや弱み）を知り、その両方をいかして他の指導者や団体、地域の人たち、行政などと連携する力、人と人をつなぐコーディネートができる力を養うことではないかと思います。

ワークショップのなかで「人をつくるのは人」ということをあらためて学びましたが、これからもESD的な環境教育をすすめていくにあたり、私たち指導者が自身をいかに市民として、また指導者としてその資質を高めていけるかが課題なのだと思います。

環境教育 <自然体験>

ネットワークとプログラム作成力をESDの推進に

(社) 日本ネイチャーゲーム協会 渡辺 峰生

大学卒業後、専門学校にてアウトドアビジネスを学ぶ。5歳になる次女のお酌で飲む酒をこよなく愛すお父さん



ネイチャーゲームとは……

ネイチャーゲームは、1979年アメリカのナチュラリスト ジョセフ・コーネル氏が書籍「Sharing Nature with Children (子どもたちと自然をわかちあおう)」で発表した自然体験プログラムです。さまざまな感覚を使って直接自然を体験することから、知識や年齢に関係なく大人も子どもも一緒に楽しむことができ、また、空き地や神社、公園など身近な自然でも楽しむことができます。子ども会などの社会教育の場や、幼稚園小中学校など学校教育の場、または家族や友人などプライベートな場などで活用されています。

日本では現在、約11000人のネイチャーゲーム指導員があり、全国的な組織（国内普及：社団法人日本ネイチャーゲーム協会、県内普及：都道府県ネイチャーゲーム協会、市町村内普及：地域ネイチャーゲームの会）で展開されています。

■他分野の方と接して感じた2つの「重なり」

今回シナリオ作成ワークショップに参加し、ESDに関連する多分野の団体の方々と知り合い、それぞれの団体の歴史や実践について知ることができた。平和教育、人権教育、ジェンダー教育など、私たちがネイチャーゲームをとおして実施している自然体験活動をベースとした環境教育の分野にとって、普段あまり接点のない分野について知ることでは、二つの「重なり」を感じることができた。

一つは歴史を知ることでの「重なり」。それぞれの活動の歴史のなかに、どこか自分の分野の歴史にも共通する（重なる）事項をみつけられた。もう一つは想いを知ることでの「重なり」。行っている活動はそれぞれの分野に即した活動ではあるが、「みつめている方向」は皆一緒で、その視線の先は重なっているということ。

それぞれの活動の過去にある「重なり」と、これから未来に向けた「重なり」。こうした接点を知ることで、自分たちの活動の位置や役割を再確認できたとともに、他団体の活動への理解や共感を得られたことは大きな学びであった。

■複雑にからんだ課題だからこそ多分野連携のESD的アプローチが必要

ESD全国フォーラムで「あなたにとってのESD」について聞かれたとき「笑っている人の陰で泣いている人がいる。みんなが平等に幸せになれること」と回答した。

現在「持続可能な」と表現されるという裏には「持続不可能な」現状があり、この現状を改善すべくさまざまな分野でそれぞれの取組みが行われているわけだが、多種多様で複雑な問題がからみ合っている現代社会においては、ある一分野の目の前の課題をクリアするだけでは、根本的な問題はなんら解決しないのは知ってのとおりである。この

複雑にからみ合った難解な課題を解決するためには、病気の治療に例えるのならば、内服薬の服用、病気にかからない体質をつくる食生活の改善、強い体をつくるための運動不足の解消など、さまざまな複合的なアプローチによる取組みが必要である。「持続可能な社会」の実現においても同様に、ESDに関連する多分野の組織、団体の連携協働における複合的なアプローチが必須ではないかと考えている。

■ネイチャーゲームのもつネットワークとプログラム作成力をESD推進に

では、ネイチャーゲームがESD（持続可能な社会の実現）にどのように貢献できるのだろうか。たくさんの視点があると思うが、あえてあげるのならば「ネットワーク」と「プログラム」ではないかと思っている。われわれネイチャーゲーム組織は、主にネイチャーゲーム指導員で構成された組織であり、現在全国に11000人の仲間がいる。また、この指導員が所属する都道府県ネイチャーゲーム協会や市町村内での普及を担う地域ネイチャーゲームの会など、ネイチャーゲームという手法を指導することができる指導者ネットワークが確立されており、全国レベルから地域レベルまでのESDの活動に対応することができる。

またネイチャーゲームでは「楽しさは学ぶ力」といった考え方があり、知識からではなく楽しい体験をとおした学びを提供することや、そうしたプログラムを作成するノウハウをもっている。一見わかりにくい、とっつきにくいといわれがちなESDに対しても、こうしたノウハウを十分に活かせるのではないだろうか。

「持続可能な社会」の実現は他人の話ではない。われわれ一人ひとりが当事者として、その実現に向かう意識をもつべきである。ネイチャーゲーム指導員はその実現への力となるネイチャーゲームの技術や知識をもつ者としてESDへのかかわりをもってもらいたい。



環境教育 <エネルギー>

唯一絶対の正解がないからおもしろい

(財) 社会経済生産性本部 エネルギー環境教育情報センター 大内 敏史

福島県出身。84年「エネルギー環境教育情報センター」設立以来一貫して学校などにおけるエネルギー環境教育の支援活動に従事



エネルギー環境教育とは……

「持続可能な社会の構築をめざし、エネルギー・環境問題に関する理解を深めるとともに、課題意識・当事者意識を醸成し、その解決に向けて適切に判断し行動できる資質や能力を養う」ことを目的とした教育で、本来、表裏一体の問題である「エネルギー」と「地球環境問題」をワン・パッケージとしてとらえ、総合的な観点から考え、行動しようというのが基本的なアプローチです。

エネルギー環境教育の主な柱は以下のとおりです。



- エネルギー概念の理解（自然科学的な側面、社会科学的な側面）
- エネルギーと人間のあゆみ
- エネルギー・環境問題の認識（暮らし・産業とエネルギー・環境、資源の有限性と地球環境問題、日本をとり巻くエネルギー・環境事情）
- エネルギー・環境問題解決への対応（地球社会とエネルギー・環境、持続可能な社会とエネルギー・環境、地域社会とエネルギー・環境）
- エネルギー・環境問題の解決に向けた行動

■人権教育の歴史と実践に感じた

○○教育の根本課題

以前から同和問題について個人的に関心があり、今回のプロジェクトのなかで、(財) アジア・太平洋人権情報センターの前川さんから実践活動をとおした同和教育のあゆみを教えていただいたことは、とても有意義であった。とくに印象に残ったのは、学校で同和教育を行うことについて、親の間では「寝た子を起こすな」といった消極的な姿勢があったという点である。問題の当事者にとっての“○○教育”とはなにか、を考えさせられる根本的な問題提起であった。

人権教育の基本方針の一つである「就学、学力、進路を保障するための教育」とエネルギー環境教育との連携の可能性についても示唆を受けた。今でも電気を使えない人が世界の4分の1を占めているという状況のなかで、途上国の実情や自然環境に応じた再生可能エネルギーなどの活用により子どもたちの学習環境を整備する、といった支援活動が行われており、こうした取組みを教材として人権とエネルギー・環境問題を考えるような学習の展開もあるのではないだろうか。

■○○教育は ESD を触媒に質的な変化・発展を

ESDとは、「これまでにない新たな取組みではなく、すでに学校教育などで実践されているさまざまな教育活動

（環境教育、開発教育、人権教育、福祉教育など）の積重ねであると同時に、それぞれの教育活動がESDを触媒にして質的な変化や発展を遂げる双方向の営みである」との思いを強くした。その意味では、ESDは無限の広がりと可能性をもっているといえる。逆に“○○教育”的立場から考えると、ブラックホールにも似た“ESDワールド”に飲み込まれないための強靭な自我を鍛える不断の努力が求められることになる。

■唯一絶対の正解がないテーマ

ESDが包含するさまざまな教育活動のなかでも、環境教育やエネルギー環境教育はもっとも相性のよい分野の一つといえる。ESDのエッセンスである「参加体験型・問題解決型の学習を通じた多面的なものの見方やコミュニケーション能力の育成」は、エネルギー環境教育のねらいそのものである。私自身も、エネルギー環境教育のおもしろさ・可能性は、「唯一絶対の正解がないテーマであり、一人ひとりのアイデア・判断・行動がその時代の選択肢である」とあると考えている。

今年度から当センターとしても、ESDをベースとしたエネルギー環境教育の新たな展開を模索している。ワークショップへは2回だけの参加であったが、今回の経験を活かしながら、今後、具体的なカリキュラムや学習プログラムを提案していきたいと考えている。

青少年育成

216カ国 2800万人参加のボーイスカウトで ESDの世界的な展開を

(財) ボーイスカウト日本連盟 吉村 敏



日本連盟事務局職員。専従指導者。全般的な教育プログラムの企画、指導者トレーニングなどを主に担当



ボーイスカウトとは……

ボーイスカウトは、1907年にイギリスで誕生した世界的な青少年教育運動で、216の国と地域で2800万人が参加をしている。ボーイスカウトの理念は「よりよき世界を築くことに貢献すること」であり、そのために青少年の教育として、青少年一人ひとりが心身ともに健全に育つこと、また、責任ある市民として物事を主体的に考え、積極的に社会に貢献できる行動がとれる人材に育つことを願っている。

代表的な教育手法としては、キャンプやハイキングといった身体的な野外活動や地域社会でのさまざまな分野での奉仕活動があり、これを異年齢の青少年たちで構成された小グループで行っている。これらの活動は青少年が自己の適性を探り、将来の職業を考える機会となるとともに、仲間たちとの活動によってリーダーシップを培うことになる。

■食農教育・人権教育は身近で活動にとり入れやすい

今まで野外活動との観点から環境教育について多くの団体と連携してきたが、ESDによって新しい視点での関係が築けた。とくに食農教育、人権教育は、子どもたちにたいへん身近なこととして伝えていくことができる。

例えば、ボーイスカウトのキャンプでつくる食事をテーマに選ぶことができるし、子どもたちが自分たちの力でいろいろなことを計画し、それによって起こる問題を解決していく過程では、他人を尊重するといった人の権利をテーマにしたことを自然ととり入れることができる。さらに、それぞれのテーマを扱う食農、人権教育ともに歴史と実績があり、資料や活動事例などが多く、子どもたちが取り組みやすいだけでなく、指導者にとっても受け入れやすいものであると思った。

■ESDを世界的に展開させる可能性

ESDは、「持続可能な開発」を既存の分野に固執することなくとらえ、さまざまな分野での課題に対するアプローチや手法を利用し合うことで、より効果を高められると感じた。そして、それにいたる一連の「過程」に教育的意義をたいへん感じた。

また、ボーイスカウトは「よりよき社会づくり」が大きな活動理念であり、そのために青少年教育活動を行っていることから、ESDの構造にぴったり合致すると考えられる。さらには、ボーイスカウト運動は、ガールスカウトと同じ

く世界的な活動であることから、日本国内だけでなく国際間でもESDを展開できる可能性を十分に感じられる。今まで「環境教育」「国際理解教育」「開発教育」「平和教育」などを展開してきたが、今後これらをより一層に推進しながら、ESDとしての関連性をもったものとして展開していくと考えられる。また、これによる新しいパートナーシップを構築することができ、それぞれの教育がもつナレッジを共有することも可能になってくると思える。

■まずは指導者にESDを伝え、 地域で他の教育活動との連携を

ボーイスカウトの理念と使命がESDの考えと一致しているということを、まず、ボーイスカウト指導者に伝えている。また、ボーイスカウトでの活動事例、とくに地域社会に参画する事例を他教育にも発信しながら、他の教育活動との連携を一層に図れると思える。

例えば、ボーイスカウトでは、子どもたちにわかりやすいバッジ制度を設定しているが、他教育の協力を得て、新しいバッジ（プログラム）を設定するようなことでとり入れることも可能である。

また、ボーイスカウトが4年に一度開催するジャンボリー（全国大会、次回2010年静岡）で「地球開発村」（Global Development Village）という名称で行っているプログラムに、昨年度の大会（2006年石川）に引き続き、今後の大会においても積極的にとり入れていける。このように多くの面でESDをボーイスカウトの教育活動のなかにとり入れていけると考える。

青少年育成

他人の幸せを自分の喜びにできる人づくり

(社) ガールスカウト日本連盟 片岡 麻里

小学3年生のときにガールスカウトに入会し、今日にいたる。野外活動が大好きで、光合成が元気の源



ガールスカウトとは……

小学校入学1年前の少女からガールスカウトになることができます。ガールスカウトでは、少女の教育を女性が行います。その方法は、異年齢の少女が小グループで活動し、そこで学習するというものです。『自己開発』『人とのまじわり』『自然とともに』を活動の3つのポイントとして、"少女自らが発案し、具体的に活動する"ことから始まります。ガールスカウト運動を始めたロバート・ペーデン・ポウエル（イギリス）は、一人ひとりの少女が幸せな人生を送ることを願っていました。そして、幸せとは、他の人を幸せにすることによって得られると考えていました。私たちガールスカウト日本連盟は、「少女と若い女性が、自分自身と他の人々の幸福と平和のために、責任ある市民として、自ら考え行動できる人となれるようにする」ことを使命としています。

■少女一人ひとりの成長に合わせて大人が支援

ガールスカウトの大切にしている考え方、「人間の力ではなくともならないことがあるということを認めること」「社会に対する責任を果たすこと」「人に役立つこと」があります。世界中すべての人が平和に暮らすことができるため、一人ひとりが行動することが大切であると考えています。

そのためには、社会に関心をもつことや、考えることを行に移す方法を知っていて、行動に移すことができる能力を身につけていることが重要です。ガールスカウトでは、少女がそのような関心や能力を身につけられるよう、一人ひとりの成長に合わせて支援する大人の指導者とともに活動しています。その活動には、ESD-Jにつながっているさまざまな活動分野がくまなく含まれています。ガールスカウトの指導者にも、さまざまな技術や専門性をもった人たちはたくさんいますが、私たちの身の回りには、ESDをキーワードとともに力を貸し合える仲間がたくさんいることに気づきました。そしてお互いが協力し合うことで、もっと大きな持続可能な社会を創る力になれるのではないかと感じました。

■人権やエネルギー環境の分野と連携するなら……

今、世界のガールスカウトが「私たちの権利、私たちの責任」をテーマに活動に取り組んでいます。このテーマのもとで、例えば、人権教育の分野で活動されている方々と連携するならば、日本での「人権」に関する実情や、「人権」を考えるときの切り口などを教えていただきながら、子どもたちが「権利」と「責任」について考えることができます。

また、エネルギー関連の活動をされている方々と連携して活動するのであれば、日本のエネルギー事情や、そこで課題、課題解決のために事業者が取り組んでいることを知り、自分たちのうける恩恵と、持続可能な社会のために自分たちができることなどを考え、実際に取り組んでみるという活動ができます。

ともに活動することによって、ガールスカウトは、より専門的な情報を得ることができ、少女が自ら考えるきっかけを得ることができると同時に、社会のしくみを知ることができます。そして、私たちが提供できるのは、少女が自ら考え行動できるように支援できる指導者と、次代を担う少女の育成の場です。そして、学んだ少女は、自分の身近な社会に発信したりして、影響を与えることができます。

■お互いに興味をもち、つながることから……

それぞれの活動分野の常識は、他の分野の常識であることもあるかもしれません。でもそれを知ることは、多様なものがともに持続可能なものとして存在できる社会をつくりだすためにとても必要なことです。そして、他の分野の活動をしている人と連携することは、その分野に関心をもつ人を増やすことになり、関心をもつ人を増やすことは、持続可能な社会を構築するための第一歩となると思います。「ESDって大切」と気づいた人が、お互いを認め合うことはいうまでもありませんが、お互いにつながり、視野を広めていくこと、そのことが、社会にこの考えを広く根づかせる第一歩となると思います。みなさんも隣で活動する人に興味をもって、どんな人かを知って、つながることを始めてみませんか。

国際理解教育

企業と連携した学校向け ESD 授業を、ESD-J 会員とも

(社) 日本ユネスコ協会連盟 長倉 義信

1997 年、広告会社を経て同協会連盟入局。現在企業担当者として、企業と連携したさまざまな事業を企画・実施



国際理解教育とは……

ユネスコは第 2 次世界大戦後の創立直後から国際理解教育における主導的や役割を果たしてきた。その憲章前文は、「戦争は人の心の中で生まれるものであるから人の心の中に平和のとりでをきずかなければならぬ」で始まり、無知と偏見をとり除くことが平和の実現に不可欠であると謳っている。1974 年には第 18 回ユネスコ総会で「国際教育勧告」を採択。相互の理解と尊重による文化間理解を強調し、国際理解、国際協力、および国際平和の実現を妨げる民族・平和・人権・開発・文化面での問題を認識するとともに、問題解決のための行動を、教育をとおして、あらゆる教育形態・規模において推進するとしている。そして、ユネスコの国内における民間団体の母体である日本ユネスコ協会連盟は、世界遺産保護・保全活動や教育支援=世界寺子屋運動をテーマに学校現場で国際理解教育を実践している。

■一団体だけでは限界がある

「とかく、地球温暖化・CO₂ 問題というと森を守り木を植える、という活動がでてくるが、これは問題解決のための一手段であり、これだけで学びを培っていくのは非常に危険である」「本来はこの学びの後にある実践と、そこからさらに人間も含む生態系の全体の問題を含めて考えなくてはならない。また自分の地域と世界で起こっていることの対比を行う過程で、“気づき”から“継続した実践”につなげていくことが重要なのが、一団体だけではどうしても限界がある」。

環境教育を実践している方からの発言であったが、他の方も同様の理由を挙げ、改めて団体同士の活動を連携させ「点」から「線」、そして地域を巻き込んで「面」として展開していくことが必要であると痛感した。

それぞれの教育活動は、成立の背景、歴史、目的において特性を活かし発展してきたが、個々の教育分野で問題としていた地球規模の課題は互いに結びついている。ESD は、環境教育や開発教育、人権教育といった従来の枠を超えており、今までにない大きな広がりになっていく可能性があるのではないだろうか。

■ 「ずっと地球に生きる学校プロジェクト」

当協会連盟は、ユネスコが「ESD の 10 年」の国際的取り組みにおける主導機関に決定したことを受け、2005 年にはメディア（読売新聞社）と共に「ずっと地球と生きる学校プロジェクト（以下『学校プロジェクト』）」を開始した。ESD という言葉のわかりにくさを配慮して、日々の生活に

かけ離れていないテーマを設定するために、国際理解教育に環境教育を複合させる形で実施した。もちろん、ESD は環境に特化した取組みでないことを十分承知したうえのことである。

「学校プロジェクト」では、環境活動を CSR として行っている企業や地域 NGO、そして学校をつなぎ、「総合的な学習の時間」で出前授業を行っている。またこの取組みを読売新聞は、メディアの責任として、紙面を通じて伝える役割を担っている。

授業は、協力企業と当協会連盟などが受けもつ 2 部構成で、企業は地球環境に配慮した取組み（例：電力会社=「省エネ問題」、紙会社=「森林問題」）を、実験などをおりまぜながら実施する。一方、当協会連盟が受けもつ授業では、環境を切り口に「世界寺子屋運動」の支援国や世界遺産で暮らす人々の文化や生活を通じて、世界でおきている問題を紹介している。

企業と当協会連盟の連携授業で、未来を担う子どもたちに、現在の地球をとり巻く問題点をわかりやすく伝え、世界と日本のあり方、自分たちにできることを身近なところから考え、「ずっと地球と生きるために」=「持続可能な社会」について自発的に学び、行動してもらう。ESD 概念のもと、行政、学校、企業、地域、団体がつながっていくことができるるのである。

「学校プロジェクト」は、これまで当協会連盟が単独で行ってきた国際理解教育に対し、企業が身近な取組み事例を紹介するという新たな側面を加えた。今後は、ESD-J 加盟団体にも協力をよびかけ、ESD の取組みを「線」から「面」にしていくと考えている。

試作!

小さなシナリオたち

ジェンダーカード

企画者 太田、片岡、渡辺、福田

領 域 ○○教育 + ジェンダー教育

対象・人数 指導者向け 10～20人

所 要 時 間 ○○教育のプログラム内容によって異なるが、
半日～1日程度



ESD 推進のなかでこのプログラムが果たす役割

・ ○○教育（例えば、環境教育）のなかで、見過ごされていたジェンダー問題に気づいてもらう

準備するもの・会場のしつらえ

・ 青、黄、赤のカラーカード 各1枚

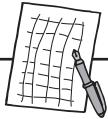
背 景

1. 環境教育等、○○教育のプログラム内（例えば、リーダー研修など）で、ジェンダーの視点から配慮に欠ける行動・発言・表現があるかもしれない。例えば、キャンプで「男の子は薪の準備、女の子は食事の準備をして下さい」など
2. ジェンダー教育は、講義や啓発の形式が中心で、参加型・体験型のプログラムが少ない

目 的

- ＜行為目標＞ ゲーム感覚で声をあげることを経験し、ふだん感じている違和感に対して声をあげることや、行動することの重要性を知る
- ＜成果目標＞ ふだん意識していない、価値観を知る。多様な考え方を知る

..... 最後のワークショップで参加メンバーが3グループに分かれ、〇〇教育とESDをつなぐ具体的なプログラムを試作した。環境教育や青少年育成のなかで、どうやってジェンダーを学ぶのか？ あそびや食をとおして、自然・社会・人間への認識をいかに深めるか？ 時間の関係で、今回はプログラムの骨格・方向性を示すことにとどめたが、いずれも、分野横断的な視点やアプローチがちりばめられており、今後、詳細を詰め、実現してみたいものばかりだ。

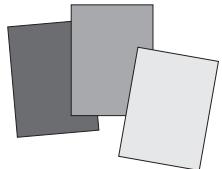


●プログラム内容

ステップ1 活動名 ゲームのルール説明

ねらい ルールの把握

- ルールの概要
 - ・教育プログラムやリーダー養成の場面を想定し、実演者が想定した場面の登場人物として前に出て講義、説明、解説などを行う
 - ・実演者はその中にジェンダー問題にふれるような発言や行為をあえて入れる（もしくは、意識せずやってみるのも面白いかも）
 - ・参加者はそれぞれの感じ方で、ジェンダー的に問題だなと思った発言や行為があつた瞬間に、対応したカードをあげる
- ＜カードの使い方＞
- 青カード：ジェンダーを意識したよい発言のあつたとき
- 黄カード：問題だなと感じたとき
- 赤カード：非常に問題だと感じたとき
- ゲームの心かけ
 - ・あくまでもシミュレーションゲームであることを事前に共有する（本気の争いごとが起きないような言葉がけ）
 - ・楽しさをまじえながらすすめるようにこころがける など



ステップ2 活動名 場面決め

- ねらい 参加者のイメージを共有する、なるべく具体的な場面がよい
- 概要 それぞれの組織活動のなかの「ある場面」を想定する

ステップ3 活動名 ジェンダーイエローカードゲーム

- ねらい
 - ・「ゲーム」が始まると宣言することで、実演者にイエローカードが出たときの負荷を軽減させる
 - ・ジェンダー問題に対する実演者の意識を自覚してもらう
 - ・自分の判断をあげることで自らがもっている価値観に気づく
- 概要 上記ルールに沿って、実演とジャッジメントを行う
補助者は、どんな発言の時に何色のカードが何枚あげられたか記録をとつておく

ステップ4 活動名 共有・わかち合い

- ねらい 結果を分析することで、今後の実際の活動に活かしてもらう
- 概要 青、黄、赤カードはどんな発言、行為に多かったか？ 参加者はどう思ったか？ 感じたか？ 実演者がねらったこと、などをまじえながらそれぞれ感じたことをわかち合う

「あそび」探検隊

企画者 長倉、安西、志村、内村、村上

領域 環境 + 多文化

対象・人数 小学校高学年

所要時間 小学校の授業 外部講師 4コマ + 担任 4コマ



ESD 推進のなかでこのプログラムが果たす役割

- ・関心をもつ「入り口」で終わらせるのではなく、ESD が「めざす方向性」がみえるものにしたい
- ・日本野鳥の会・日本ユネスコ協会連盟・日本自然保護協会 (NACS-J)・自然体験活動推進協議会 (CONE) など、それぞれの会員が協働で一つのプログラムをつくり、学校とつないで実践するモデルをつくる

準備するもの・会場のしつらえ

- ・野鳥観察・自然観察指導員、CONE リーダーと自然観察・自然体験に必要な道具
- ・アジア諸国の遊びを紹介できる人とその道具
- ・昔の遊びを語れる地域の老人とその道具 など

背景

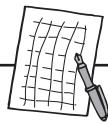
- ・身近な遊び場の消失、自由な時間が少ない忙しい子どもたち、電子ゲームの普及など遊び環境の変質など、子どもをとり巻く遊びの環境は激変しており、現在の子どもは「遊び」まで、大人に与えられた枠にはめられていように感じる（公園に集まても、それぞれにTV ゲームをしている……??）
- ・大人社会も、暮らしを支えるさまざまな仕事をアウトソーシングすることで便利になってきた反面、与えられる製品やサービス、情報に支配され、自ら考えたり、工夫したりしながら暮らしを創っていくことの「豊かさ」が見失われてきている
- ・持続可能な社会を創っていくためには「想像力」と「創造力」が不可欠であり、子どもの間に、さまざまな遊びをとおして想像すること、創造することの楽しさを体験するとともに、想像する力・創造する力を鍛える必要がある
- ・小学校では、総合的な学習の時間だけでなく、さまざまな教科にもつながる ESD 授業のモデルとなるプログラムが求められている

目的

＜行為目標＞ いろいろな遊びを調べ、体験し、オリジナルの「環境にやさしい遊び」を創るもののライフサイクルと環境への負荷を知る

＜成果目標＞ 「自分で創れる」ことを実感することで、いろいろなものを「創る」ことに関心をもつようになる
持続可能性を視野に入れた「ものづくり」に関心をもつようになる

小さなシナリオ



●プログラム内容

- 1 コマ目 活動名 **今の遊びを調べよう**
 ねらい 動機づけ
 自分たちの遊びの現状を知る
 概要 今ハマっている「あそび」、ちょっと前まで流行ってたけどもう古い「あそび」、自分だけのオリジナルな「あそび」など、いろいろなカテゴリーで今の「あそび」環境を俯瞰する
- 2 コマ目 活動名 **野鳥大好きおじさんの「あそび」1=野鳥の暮らしをのぞいてみよう**
 ねらい 野生生物がどのように生きているかを考える
 概要 スズメを観察し「すみかとしてなにが必要か?」「食物としてなにが必要か?」「なにに食べられるか?」を考える
- 3 コマ目 活動名 **野鳥大好きおじさんの「あそび」2=自然のしくみを考えてみよう**
 ねらい 共存と循環、すなわち持続可能な自然のしくみを知る
 概要 スズメの子育てに必要な虫、虫を養う植物、植物を養う土壤や太陽に視点を広げて、太陽エネルギーを元に生産者・消費者・分解者がつながっていることを知る（分解者が排泄物や死体を土に戻し、生産者=植物を支え、消費者=動物を支えている。消費活動が持続可能なのは鳥がいて虫が増えすぎないから）
- 4 コマ目 活動名 **おじいさん・おばあさんが小さかったころの「あそび」**
 ねらい TVゲームやサッカーなどがなかったころの子どもの遊びを体験する
 概要 とにかく昔の遊びをたくさん体験する。保護者やご近所の大人も一緒に楽しめるような場所にする
- 5 コマ目 活動名 **日本の「あそび」のふりかえり**
 ねらい さまざまな「あそび」を分析し、今の自分たちのあそびの特徴を考える
 概要 さまざまな「あそび」を分類し、その特徴を考える（自然や資源との関係、生産と消費の関係、ルールをつくっているのは誰か、工夫の余地など）
- 6 コマ目 活動名 **アジアのお友だちの「あそび」**
- 7 コマ目 ねらい アジアの国々の素朴な遊びを知り、自然との関係や文化の多様性を知る
 概要 ユネスコメンバーやJICA協力隊OB、国際交流協会などの協力を得て、東南アジア、中国・韓国などの伝統的な「あそび」を体験する。また今の子どもたちの状況なども学ぶ（あそびだけでなく、貧困や難民なども？）
- 8 コマ目 活動名 **オリジナルな「あそび」を考えよう**
 ねらい 「創造」する楽しさを知る
 概要 学校周辺の素材（場所・人・モノ……）を生かした、環境の負荷をかけないオリジナルな「あそび」を考える

食から ESD を考える

企画者 前川、清水、吉村、若林

領 域 食農、食育、食と安全、食と人権

対象・人数 市民（子ども～大人）20人程度

所要時間 春夏秋冬をとおして1年間

ESD 推進のなかでこのプログラムが果たす役割

- ・食は自然と人間が一体となることをあらためて実感する
- ・経済・社会システムの関係を、食と農をとおしてみつめなおす
- ・世界のつながり、食におけるジェンダーの視点を加える
- ・食にかかわる生産者（農業者、漁業者、食肉業者）と消費者をつなげる視点を重視する



準備するもの・会場のしつらえ

市民農園が近くにある公民館など（厨房施設があること）

背 景

- ・世界中の食材がお金で手に入る現状、食糧自給率40%をきる日本の現状
- ・食の安全性が崩壊している（農薬、遺伝子操作、ポストハーベスト、添加物）
- ・生産性の原理に支配されている
- ・季節、地域性を失った食文化
- ・食に関する異文化理解

目 的

＜行為目標＞ 1 食の現状を知る

2 健康で安全な食文化を理解する

3 自分の買い物の選択基準がつくれる

＜成果目標＞ 1 食に季節感をとり戻す

2 自然、文化、歴史の多様性を理解し、日常生活に活かすことができる

3 食の安全に対する理解が身につく

4 個人の食に対する創造性、寛容性を認め合うことができる

●プログラム内容 「エコロジカルな食の歳時記をつくる」

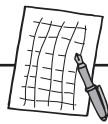
ステップ1 **活動名** ふだん自分が食べている食のライフスタイルを知る方法を身につける

ねらい 自分の食生活、買い物の選択基準について、客観的に観察してみる。自分の食べ方、食べ物の傾向を知る。
自分の食に対する価値観を知る。自分の食の価値観はどのように形成されているのかを知る

概 要

- ・「食事バランスガイド」をつかって、1週間自分の食事（3食）を点検し、自分の食の傾向を知る
- ・どこで買う？ 何を買う？ 買うときの基準は？ 食費はいくら？ 家族で買い物を担当しているのは誰？
- ・自分はなにを食べている？ その傾向は？
- ・自分が食べているもののうち、外国産と日本産はどれくらい？
- ・ある日買った外国産農産物のフードマイレージを炭酸ガス排出量で計算し、国産の食品と置き換えた場合と比較してみる（例：「大地を守る会」のツールを活用）

小さなシナリオ

ステップ2 活動名 **自分の住んでいる地域で生産されている農産物を調べる**

(直接ではない場合には、最も近い近郊の場所で生産されているものを調べる)

ねらい 自分をとり巻く地域の食物生産の現状を理解する。地域でどんな農産物が、どのような人によって、どのような方法で生産されているのか、日本の経済・社会システムにどのように関与し影響を受けているのかを知る。食の安全性について学ぶ

概要

- ・誰がなにを生産しているか？どのくらいの種類のものが生産されているのか？
- ・農薬はどの程度使われているのか、いないのか？農薬を減らす農法的工夫は？ポストハーベストや遺伝子組み替え作物についてどう考えるか？
- ・家畜の飼料はなに？
- ・誰が農作業の担い手？あとつぎは？
- ・どのようなルートでどのような市場に出荷されているのか
- ・出荷された市場で取引されている価格は？小売店での販売価格に占める手取りの率は？価格や手取りの増加・減少の傾向は？

ステップ3 活動名 **地域の伝統食を調べる**

ねらい 伝統食を通じて、各地の地域の伝統文化、歴史、自然の多様性を知る。地域の自然と食べ物の歴史と文化を知る。誰が（ジェンダー観点）どのような方法で継承してきたのかを知る。これらのこととの生活にどう活かせるか考える

概要

- ・地域の古者から、かつての季節季節の旬の食べ物と料理法、余りものの加工・貯蔵の工夫（年間をとおした食いのばしの技術）、行事食と行事（家・地域）の思い出などを聞きとり、自然と調和した共同の生活の生活文化やリズムを知る
- ・伝統食のレシピを一番知っているのは誰？つくっているのは誰？辛かったことと楽しみと
- ・伝統食には、地域で生産されている農産品がどのように使われているのか。地域で生産されていない材料はどのようなルートで手に入れられているのか？
- ・食物連鎖（生産者＝植物、消費者＝動物、分解者＝微生物など）を学び、いのちの連鎖を知る。人間と動物の共通性と違いについて考える
- ・地域の伝統食を料理して食べてみる。近くに外国人がいれば、各国の伝統食をそれぞれつくってもらい、風土と食物の関係や、それぞれのエコロジー的合理性を知る

ステップ4 活動名 **自分なりに地域の特色を活かしたエコロジーだと考える一年の食の歳時記を作成してみる**

ねらい 地域の季節、自然の特性を知る。自分の食生活について主体的にかかわる。自分の健康は自分でつくることを意識する。命の大切さに気づく。食の季節感を考えながら、安全性が高く、かつ食生活を豊かにできる方法を考える

概要

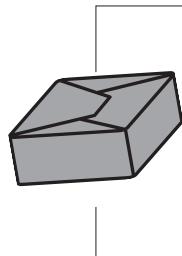
- ・一番たくさんの種類が生産できるのはどの季節？
- ・足りないものはどこからどうやって調達する？

ステップ5 活動名 **自分で作成した食の歳時記のメニューから、実際に市民農園で栽培し収穫し料理をつくり、食べることを体験する**

ねらい 一連の体験を通して、食べ物に関するさまざまな自然や人や社会の関連性を知る。食に対する価値観は人と異なることを知る、創造性、寛容性を認め合う。地域の人々、仲間と体験を共有し交流しながら相互に理解を深める

概要

- ・栽培できない場合には、調達して料理をつくるところから取り組んでもよい
- ・その味は？
- ・ステップ1～4の体験を通して考えたこと、感じたことをまとめる
- ・参加した仲間と共有する。他の地域ではどうだろう？



ESD シナリオづくりワークショップ 「3回パッケージ・プログラム」

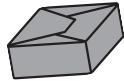
ESD シナリオづくりプロジェクト・ファシリテーター 嵐嶽創平

ESD（持続可能な開発のための教育“未来をつくる教育”）という言葉をはじめて聞く人たちにとって、ESDはなにやら概念的・包括的でどこから手をつけたらいいか、自分になにができるのかイメージしにくいのではないだろうか。逆にこれまで地域活動や教育活動を実践してきた人たちにとっては、ESDの概念や目標は自分たちがすでにってきたことだと感じることもあるかもしれない。ESDはまさに多様な経験や立場をもつ人々が集まって創っていくものであろうし、各地域によってその背景や重視する目標や手法に特徴がでてくることが望ましいと考える。

この「ESD シナリオづくりワークショップ」では、「持続可能な未来をつくる」という共通目的のもとに集まった人々が、各人が行ってきた教育活動の「経験」や持続可能な社会に向けた「思い」をもちよることで、ESDという大きな目的にいたる多様な流れを描きだし（これを「大きなシナリオ」と呼ぶ）、さらに各人・各教育活動が蓄積してきたリソース（理念や手法や対象者など）をつなぐことによって、新しい教育プログラムを生みだすきっかけにしようとするものである（「小さなシナリオ」）。地域でESDのネットワークづくりを始めようとする場合や、すでにあるネットワークで実践的な活動づくりを行おうとする場合でも、3回シリーズのワークショップをすすめる間に、参加者の相互理解や仲間意識を育みながら、ESDの見取り図や実践課題がみえてくるように設計されている。ぜひ、ご活用いただきたい。

【ESD シナリオづくりワークショップ（3回）の特徴】

- ① 持続可能な開発（未来）に向けた多様なアプローチや理念の共存を認め合う見取り図づくり、「大きなシナリオ」を参加型の学びの手法によってつくりだす。
- ② 地域のさまざまな教育活動のなかで蓄積されてきた経験・思い・理念・手法・対象・場などのリソースをつなぎながら、各教育が抱える課題を突破する糸口となるコラボレーション（協働）プログラム「小さなシナリオ」づくりを行う。
- ③ 3回のワークショップでの共同作業や対話を通じて、参加者の相互理解と信頼関係を深め、実際的な協働ネットワークのための土台づくりを図る。



第1回ワークショップ **ESD ってなんだろう？ & お互いを知ろう！** (6ページ)

所用時間	約 3 時間 30 分
参加人数	10 人～30 人
会場設定	小学校教室 1～2 室程度の広さの部屋にイスと長机を用意
準備する物	A4 コピー紙 (50 枚位)、サインペン (人数分)、セロハンテープ、合図のベルか笛、ESD 講義用の資料 (人数分)、プロジェクトと PC (必要に応じ)
スタッフ数	進行役 1 名、進行役補助 1 名、記録係 1 名

0:00～ オリエンテーション (10 分)

- ・ESD シナリオづくりワークショップの目的と 3 回の流れ説明
- ・主催者およびスタッフの紹介など

0:10～ ESD への導入講義「ESD ってなんだろう？」(50 分)

- 【内容例】 1 「ESD がわかる！」(経緯、3 つのポイント、花びら概念図など)
2 「わかる！ ESD テキストブック シリーズ 1 基本編」(パワーポイント使用、131 ページ)

時間があれば質疑

1:00～ 休憩 (10 分)

- ・会場をスクール形式から円卓形式に変える

1:10～ アイスブレーク (20 分)

- 【実施例】
- ・簡単な自己紹介 (名前と所属) とニックネーム (呼んでほしい名前)
 - ・カテゴリーゲームなど (参加者の属性やプロフィールを知り合う)

1:30～ ESD シナリオづくりをする前に「お互いを知ろう！」(90 分)

- 【すすめ方】 即席フリップチャートを使ったトークセッション
A4 白紙を 2 つ折にして表裏 4 面にクイズ番組の回答ボードのように質問に対する自分の答えを書いて順に発表します。

- 1 私がかかわっている活動紹介 (そのテーマや教育分野を簡単に紹介)
 - 2 私が○○教育にかかわり始めたきっかけ (時期は 19○○年ごろ～)
 - 3 ○○教育の代表的な教育活動 (プログラム) を一つ教えて / 資料配布も
 - 4 私が○○教育で伝えたいメッセージ
 - 5 私が考える○○教育の課題
 - 6 私が ESD シナリオづくりワークショップに期待すること
- ※ 各設問に対する全員の回答を披露し合った後、壁などに貼りだしてもよい

3:00～ ESD シナリオ・ワークショップへの期待整理 (30 分)

前項の回答 6 を使って、ワークショップ参加者が「この場」に期待することを整理・確認する

- 【まとめ方の例】 各グループでまとめ方を工夫することは自由。一例として、フィリピン教育演劇協会 (PETA) が行っている「O-A-O 方式」(5 ページ) の 3 分類を紹介
> [Oriental] ESD の目的や成果の達成を重視する期待
> [Artistic] ESD の手法や情報収集を重視する期待
> [Organizational] ESD のネットワークづくりや協働体制を重視する期待

3:30～ まとめのあいさつ、ワークショップ終了

第2回ワークショップ ESDにつながる「大きなシナリオ」づくり (7ページ)

所用時間	約3時間30分
参加人数	10人～30人
会場設定	小学校教室1～2室程度の広さの部屋にイスと長机を用意
準備する物	ワークシート①(「回想ヒント集と両面×人数分)、ワークシート②(人数×2)、模造紙フォーマット(フェーズI～IV各1枚)、ポストイット4色(7cm×7cm各1束)、青と赤の丸型シール(各人数分)、色マジック(数セット)、サインペン(人数分)、セロハンテープ、合図のベルか笛、A4コピー紙(予備)
スタッフ数	進行役1名、進行役補助1名、記録係1名

0:00～ 主催者オリエンテーション(15分)

- 前回のふりかえり、初参加者の紹介、今回の目標など
 - 今回の目標確認：持続可能な未来に向けて、さまざまな教育アプローチがもっている共通要素／目標を「ESDにつながる大きなシナリオ」という形で共有する。同時に、参加者間のコミュニティ(連帯感)を醸成するなかで協働への土台づくりをはかる
- ワークシート②を示しながら「ESDにつながる大きなシナリオ」の成果イメージを説明

0:15～ アイスブレークとグループづくり(15分)

- 【実施例】
- 頭の体操「セブン・イレブンじゃんけん」など(失敗を笑って許そう)
 - 3人1組ができたところでゲーム終了(そのまま次のグループワークへ)

0:30～ 「自分史から始めるESDとの出会いグループワーク」(60分)

【すすめ方】

- ワークシート①(次ページ)を各人に配布し、「ヒント集」フォーマット(次ページ)を参考しながら自分のライフストーリーを回想し、2014年までの自分のシナリオを語るためにメモを作成する(個人作業15分)。
- ワーク1で作成したシナリオを、グループのメンバーに物語る。そのさい、グループのメンバーはワークシート②「聞き書きシート」(40ページ)のフォーマットに整理しながら書きとり、質問をする(「ヒント集」が質問表にもなる)。(物語る:5分、質問:10分)×3人=45分
- 一人の語りについて2枚できた「聞き書きシート」を本人にかえす

1:30～ 休憩(15分)

1:45～ 「ESDにつながる大きなシナリオ・チャートづくり」(60分)

【すすめ方】

- フィードバックされた「聞き書きシート」をもとに、聞き書きシートのI～IVのフェーズそれぞれについて「価値観、方法論、場面、エピソード」の要点をピックアップし、ポストイット4色に書きだす。ポストイットの色はフェーズごとに決めておく(個人作業15分)
- I～IV各フェーズ毎に全員のポストイットを集め、4グループに分かれて模造紙のフォーマット(40ページ)に整理・構造化する(グループ作業30分)
※各フェーズごとに1枚の模造紙(ヘッダーと3区分をつけた縦置きフォーマット)を配り、関心あるフェーズの作業代に分かれてスタートする

2:45～ 大きなシナリオ各フェーズの発表と共有化(20分)

- I～IVごとに整理したチャートを発表(構図の見方、大切な点や特徴など)@5分×4
- 4枚のチャートをドッキングして貼りだし「大きなシナリオ」の全体像を確認する

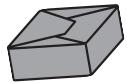
3:05～ 大きなシナリオをもとに話し合おう(25分)

- 完成した「大きなシナリオ」の内容を全員で読み込む(原体験とのつながり、各教育活動のリソースの特徴、ESDへの期待や疑問など、2015年に向けた共通目標など)

【すすめ方】

- フェーズIII(ESDに対する期待や疑問)、フェーズIV(ESDの達成目標)に関して自分が共感できると思う項目に「青シール」を貼る(1人2枚)→今回で確認して共有
- フェーズII(各教育活動がもつリソース～理論・手法・対象など～)で自分がもっと知りたいと思うものに対して「赤シール」を貼る(1人2枚)→次回で掘り下げる

3:30～ まとめのあいさつ、ワークショップ終了



ESD-J

ワークシート① 「大きなシナリオ」づくりのためのライフストーリー

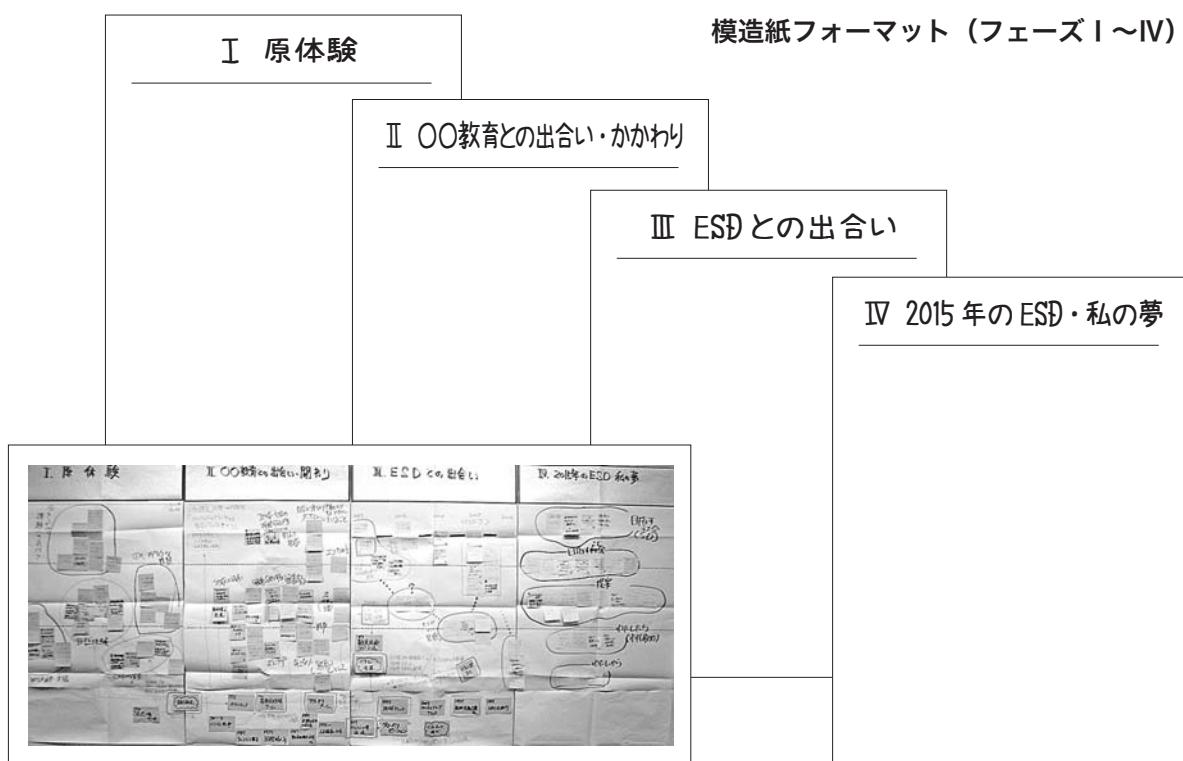
	I 原体験	II ○○教育との出会い・かかわり	III ESDとの出会い	IV 2015年のESD・私の夢
「私の物語」 原体験 ESDに出会い まで 2015に向けた ESDの夢				

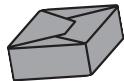
ESD-J

「大きなシナリオ」づくりのためのライフストーリー・回想ヒント集

	I 原体験	II ○○教育との出会い・かかわり	III ESDとの出会い	IV 2015年のESD・私の夢
「私の物語」 原体験 ESDに出会い まで 2015に向けた ESDの夢	生まれた町 住んでいた家 近隣の原風景 家族の思い出・親の教え 兄弟姉妹・遊び友達との思い出 近所の人たちとのつき合い 子ども会・お祭・行事 学校生活・先生との出会い 通学路・遊び場 流行った遊び・流行した言葉 テレビ番組・新製品・ヒット曲 マンガ・小説・映画 習い事・趣味・スポーツ 交友関係・ファッショ・恋愛 受験・進学・留学 社会的関心・海外旅行 就職・仕事・休日 景気・消費・ライフスタイル 人間関係・悩み キャリアアップ・自己投資	クラブ活動 ボランティア 社会的事件 本・人・グループとの出会い 研修・資格 就職・アルバイト プロジェクト 担当・赴任地・同僚 事件・社会運動 ○○教育が大切にしていること・価値観 ○○教育のすすめ方・方法論 ○○教育の現場・対象者・社会運動 ○○教育にかかわる私のエピソード	○○教育とESDの一致点は ESDの新しい点とは ESDに対する期待は? ESDに対する疑問は? ESDに出会った場面・時期は? ESDとつながる私の価値観・ 経験 ESDに使える方法論 ESDを展開したい場面 ESDを必要とする社会的背景? • 政治問題（国内、国外） • 法律・裁判 • 世界的な事件イベント • 世界的な思潮トレンド	ESDの10年（2005→ 2014）の成果として ESDと私はどんなふうにか かわっている? ESDはどんなことを達成す る? ESDによって社会はどう変 わっている?

ワークシート② 「大きなシナリオ」づくりのためのライフストーリー書き書きシート				
	I 原体験	II ○○教育との出会い・かかわり	III ESDとの出会い	IV 2015年のESD・私の夢
価値観				
方法論				
場面 ・ エピソード				





第3回ワークショップ ESDを広げる「小さなシナリオ」づくり (10ページ)

所用時間	約3時間30分
参加人数	10人～30人
会場設定	小学校教室1～2室程度の広さの部屋にイスと長机を用意
準備する物	「大きなシナリオ」模造紙（貼りだし用）、企画書フォーマット①・②（2枚組×人数分）、評価シート（人数分）、A4コピー紙（予備）、サインペン（人数分）、合図のベルか笛、書画カメラ（あれば）1台
スタッフ数	進行役1名、進行役補助1名、記録係1名

0:00～ 主催者オリエンテーション（30分）

- ・前回ワークショップ成果のふりかえり（「大きなシナリオ」全体図のポイントをふりかえり、フェーズIIの「赤シール」が貼られたポイントについて質疑応答）
- ・今回ワークショップの目標と流れ説明（ESDの共通目的に向かって、各人・各教育活動が持っているリソースを組み合わせて試作プログラム「小さなシナリオ」をつくってみよう）

0:30～ 「小さなシナリオづくり」に向けた試作チームづくり（30分）

【すすめ方】

- 1 ウォームアップ「じつは私○○なんです」（これまで紹介しなかった趣味や特技や珍しい体験などを紙に書いて自己紹介）
- 2 チャートのフェーズIIに注目して関心をもった分野・手法・対象者について書いた人のところへ行ってインタビュー
- 3 チャートのフェーズIVに注目して、将来目標や価値観を共有できそうな人のところへ行って相互インタビュー
- 4 これまでの組み合わせを勘案して最終的にチームを結成！（4～5人程度）

1:00～ 小さなシナリオ試作チームで作戦会議（20分）

【すすめ方】

- ・企画書フォーマット①と②（42～43ページ）を各人に配布
- ・チームメンバーが自己紹介をしながら、新しいプログラムの目標、対象、手法などの組み合わせについて相談する

1:20～ 小さなシナリオ試作チームの中間報告会（10分）

- ・各グループの進捗状況や方向性を聞いて、必要ならば進行役がサポートする

1:30～ 休憩（10分）

1:40～ 「小さなシナリオ」試作に向けたグループワークの続き（60分）

- ・企画書フォーマット①を埋めることが目標（②は後日でもよい）

2:40～ 小さなシナリオ「試作プログラム」発表会（30分）

- ・書画カメラ使用 or ワークシートをコピーして配布@5分程度

3:10～ ワークショップ評価＆今後に向けた話し合い（20分）

- ・シナリオづくりワークショップの成果の活かし方～次の行動につなげる方策について
- ・3回のワークショップ・プロセスをふりかえって参加者評価（評価シート配布、44ページ）

3:30～ まとめのあいさつ、ワークショップ終了

企画書フォーマット①

タイトル :	企画者 :	
●領域	●対象・人数	●所要時間・スタッフ数
●ESD 推進のなかでこのプログラムが果たす役割		
●準備するもの・会場のしつらえ		
●背景		
●目的 <行為目標> <成果目標>		

← プログラムを企画した
チーム名

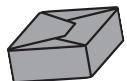
← ●領域
プログラムの扱っている分野
●対象・人数
学習にふさわしい対象年齢
●所要時間・スタッフ数
プログラム実施に必要な時間

← 幅広い ESD 領域のなかで本プロ
グラムが果たす役割 (共有・
理解・共創・推進など)

← プログラムを実施するにあ
たって必要な備品や消耗品、
会場の環境など

← 分野や対象をとり巻く社会状
況および対象者の状況を踏ま
え、企画者の思いも織り込み
ながら、総合的にそのプログ
ラム企画の背景 (= 必然性)
を説明

← <行為目標>
このプログラムをとおして、
どんな活動を実現し、どんな
成果物を仕上げることをねら
うのかを説明
<成果目標>
このプログラムを体験するこ
とで、学習者にどんな力がつ
き、どんな変化が起きること
をめざすかを説明



企画書フォーマット②

●プログラム内容

時間	活動名(ステップ)	ねらい	概要	使用するもの

↑
進行時間のめやす

↑
各ステップの具体的な活動項目



↑
その活動を行うことによって、参加者のなかに起こしたいか、どんな学びや気づきを促したいか、全体としてどんな雰囲気をつくりたいかなどのねらいを表示

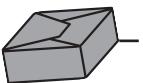


↑
それぞれのステップでどんな活動を行うのか、具体的な内容の概要を表示



↑
それぞれの活動で使用する道具や材料、備品など

評価シート



参加者アンケート ~ ESD シナリオづくりワークショップに参加して~

お名前

参加した WS : 第1回 第2回 第3回

◆プロジェクト開始当初、プロジェクトに期待したことは……

◆3回のワークショップを終えて、その期待はどれくらい満足しましたか？

・当初の期待通り、もしくは期待以上だったこと

・期待にそぐわなかったこと

◆ワークショップの進行方法について、ご意見をお聞かせください

・良かった点

・改善すべき点

◆その他、気がついたこと、メッセージなど

ありがとうございました

